

引札の様式論的考察

高橋 修

国立歴史民俗博物館蔵『懷溜諸層』と大阪歴史博物館蔵コレクションの比較検討を中心に

Paleogeographical Study on *Hikihuda* (引札) which was Distributed Handbills in the Edo Period : Comparative Study of the Collection of the National Museum of Japanese History and Folklore and the Osaka Museum of History

TAKAHASHI Osamu

はじめに—問題の所在—

- ① 本稿における引札分析の前提
 - ② 幕末期の江戸における引札の様式論的特徴
 - ③ 江戸の引札との比較からみる大坂の引札の特徴
- おわりに—広告史上における引札の歴史的位置—

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館蔵の『懷溜諸層』には多数の一枚刷りの資料が貼りこまれ、近世後期の都市生活・庶民文化を知るための手がかりの宝庫である。中でも現代の「ちらし広告」に相当する「引札」の数量は全体の二割を占め、その重要性が伺える。

そこで本稿では、①『懷溜諸層』に収載された江戸の引札を類型化し、それぞれの様式論的特徴を明らかにすること、②大阪歴史博物館で収蔵する引札を主たる分析素材とし、大坂における引札の様式論的特徴を明らかにすること、③江戸と大坂の引札を比較分析し、そこで得られた知見を広告メディア史全体の文脈の中に位置づけること、以上の三点を研究目的として設定した。

考察の結果、江戸と大坂は対照的な広告文化が育まれていたことが判明した。江戸の引札は現代のちらしと異なり、手紙の延長としての性格を有していた。商店・商品情報を直截的に伝えることよりも、文章上の巧緻を楽しませる、いわば「読ませる」ことに主眼を置いたものであった。

一方、大坂の引札は商店・商品の情報を直截的に伝えることを重視した、いわば実利的性格が強い傾向にあった。例えば、その本文は江戸のような手紙文の形式ではなく、あくまで商品情報の伝達に徹した実用文を主体としていた。一方で、画面構成や図像の工夫という点では江戸よりも発達しており、視覚的效果を重視していた。いわば「見せる」ことに主眼を置くという特徴を有していた。

従来の広告史研究では、引札の文章上の工夫という基準から江戸と大坂を比較し、相対的に大坂の地位は低く評価されてきた。だが、本稿の分析結果はそれと異なる視角を提示し得る。広告史を長期的に捉えれば、特に近代以降の広告文化は文章表現よりも視覚的效果を重視する流れにある。その意味からすれば、大坂の引札文化こそ視覚的效果重視という現代の広告メディアの特質を歴史的に先取りして準備したものと位置づけられよう。

【キーワード】 引札、江戸と大坂の比較、広告文化、様式論的特徴、懷溜諸層

はじめに — 問題の所在 —

国立歴史民俗博物館（以下「歴博」）の共同研究「近世の一枚摺文化の受容と都市社会の研究」の一環として、同館収蔵品にかかる『懐溜諸屑』（以下『諸屑』）の現物に接する機会を得た。『諸屑』とは、幕末期に活動した噺家である三代目入船扇蔵が入手・収集した主として江戸における引札や瓦版等を二八冊の帳面に貼り付けた、いわばスクラップ集である¹⁾。それらは天保（一八三〇～四四）から安政年間（一八五四～六〇）のもの、すなわち幕末期のものを中心として総数は約三五〇〇点にも及ぶ膨大なもので、内容も多岐に渡っている。

その中で特に注目されたのが引札類の存在である。歴博の「データベースききほく」により『諸屑』の「引札」を検索すると、六一五件がヒットする。これは『諸屑』に貼り交ぜられた資料全体の二割弱に相当する。扇蔵が引札に大きな関心を抱いていたことが読み解けると共に、引札こそ『諸屑』を代表する資料といえよう。

また、右の共同研究の一環として、大阪歴史博物館（以下「大阪歴博」）で収蔵する近世～近代初期における大坂の引札コレクションの実物を調査する機会を得た。『諸屑』と大阪歴博の引札に接する中、江戸・大坂それぞれにおいて特質が見受けられるとの見通しを得るに至った。そこで、本稿では、幕末期前後頃における江戸と大坂の引札を比較することで、両者の特質を明らかにすることを目的として設定した。

従来の研究では、引札は、とりわけ近世期のそれは広告史の一環として採り上げて論じられる傾向にあった²⁾。広告史によれば、引札とは商店・商品に関する広告媒体で、現在のちらし・びら、ダイレクトメール、カレンダー等の景物類の起源と位置づけられている。その発生はおおよそ一八世紀の初頭頃に誕生したと考えられる³⁾。一八世紀中後期以降は平賀

源内や式亭三馬等の著名な戯作者が引札の文案作成等に携わるようになり、さらに一九世紀に入ると「平賀源内による『読ませる引札』から山東京伝らによる『見せて読ませる引札』へと発達し、視覚的、美術的な効果も重視される」ようになった⁴⁾。

ただ、印刷技術や交通機関の問題から全国的メディアとはなり得ず、効力の及ぶ範囲はその地域に限定的されていた。また、引札は現代のようにはびら・ポスター・商標・広告・暦等の諸媒体と明確な区別がなされず、広告媒体として独立した存在ではなかった。それが近代以降には、印刷技術の発達により、近世までの木版刷に加え、石版・銅版刷の技術が進展し、前代より美麗かつ大量に引札作成を可能とする条件が整えられた。あわせて新聞・ラジオをはじめとした多様な視聴覚メディアが出現し、広告の範囲も全国的に広がり、右に記した引札（ちらし）をはじめとした様々な広報媒体もそれぞれの特質に応じて自律的な展開を示すようになった。

以上を踏まえ、引札に関する個別研究の動向をまとめると、次の二点が特徴として挙げられる。

第一に指摘し得るのは、近世期の引札研究は、残存する引札一枚ごとにおける個別研究、資料紹介的研究が多いという点である。引札の文字翻刻をとおし、そこから引札の発行者・作成者・発行の歴史的背景等を明らかにするという分析視角である⁵⁾。

ただ、右の性格の研究にあつては、歴史の変遷と地域的特性を明らかにし得ないという問題がある。歴史の変遷については、ある店が発行した引札に関し年代を越えて通時的かつ体系的に収集し・分析するという手法を採り入れる必要がある。こうした研究は現状では必ずしも多くはなく、管見の限りでは、越後屋における引札の制作過程から配布課程を詳細に追い、同店の広報活動の特質を論じたもの。ガラス細工店である加賀屋久兵衛店が発行した引札分析から彼及び同店の足跡を実証的に明

らかにした試みが挙げられる。今後、かかる視点からの研究が進展することが期待される。⁽⁶⁾

地域的特性については、先述のとおり原則的に引札とは地域限定のメディアであることから、そこには地域的特性が存在することが想定される。従来の研究では、個別地域ごとに伝存した引札を紹介し、年代・広報されている商品・図柄・発行者・製作者等に関する傾向について分析したものが主であった。⁽⁷⁾ただ、他地域間との比較をした個別実証研究は見受けられず、町場と村落に伝存した引札の特徴を検討した試みがあるにとどまっている。⁽⁸⁾また、資料の残存状況に規定されたことと推測されるが、年代的にも近代以降の引札が中心で、近世期の分析は多くはない。他地域間の引札の比較、とりわけ近世期におけるそれとおして、各地域の特性を明らかにする研究が期待される。

第二に指摘し得るのは、商品広告としての引札と新年の祝賀品として配布される正月用引札や略暦付きの引札とを比較すると、後者に関する研究が主流をなしている点である。

近世末期頃から暦の空白箇所到店の紹介をする広告文を刷り込み、新年の祝賀贈答用の景物として年末に取引先に配布されるようになったのが正月用引札の起源である。やがて、印刷技術の発達に伴い、正月風俗や吉祥縁起にまつわる図柄等が描かれた美麗な引札が作成されるようになり、明治二〇年代以降から大正期頃にかけて流行するようになる。現在の自社広告カレンダーやポスター配布の原型ともいえるのが正月用引札である。

視覚メディアとして多種多様な種類もあり、鑑賞目的としても使用されたことからコレクターも多く、全国的に多く残存している。これらを用いた研究視角も多岐にわたっている。年代・発行者・製作者等に関する基礎的分析はもとより、図像表現の意味分析や配布・収集等につまづる機能分析までなされている。⁽⁹⁾

これに対し、特に近世期における商店・商品広告としての引札については、先述のとおり、引札に記された文言分析から歴史的背景を究明するという研究方法が主流を占めている。だが、引札は「読ませる」だけでなく「見せて読ませる」ことを意識して作成されたものであるから、文言はもとより引札全体の場面構成等についても分析をする様式論的研究が必要となる。現状ではかかる視点からの個別実証研究は見られない。近世期の商店・商品広告としての研究は立ち遅れ、広告史全体の中で概説的に説明される段階にとどまっているのが現状といえる。

以上から、引札研究の課題として、①近代以降のものが中心で、近世期を対象としたものは少ない、②個別地域ごとの研究は見受けられるが、他地域間の比較研究は少ない、③特に近世期における商店・商品広告としての引札分析が少ない、④③の引札に対する分析手法が文言読解に偏り、様式論的視点からの手法を導入したものが少ないことが挙げられる。一般的に、正月用引札は鑑賞目的のために保存・コレクションされる傾向にあるのに対し、商店・商品広告としての引札は廃棄され易く、多く伝存していない。加えて、近世期の引札は年代不明のものが多く、研究対象としにくい。

かかる課題に対し、本稿では『諸層』及び大阪歴史博所蔵コレクションの引札を分析対象として用いることで、その解決を企図している。『諸層』における引札は、その一点ごとの年代は不明である。だが、他の貼り交ぜられた資料の年代傾向から、おおむね江戸における幕末期のものと思ふことができ、①の課題に対応し得る。また、『諸層』全体の大きな特徴として、優品か否かを問わずあらゆる一枚摺りの資料が雑多に収集されている。幕末期における商店・商品広告の実態を明らかにする上で最適の素材であるから③の課題に対応し得る。あわせて大阪歴史博の引札は良好な状態で当時の原形態のままに保管されていることから、②江戸との比較分析及び④様式論的研究には最適の分析素材である。

これらを踏まえ、次の三点を本稿で明らかにする課題として設定したい。第一に、『諸屑』を素材として江戸における商店・商品広告としての引札の様式的分析を行い、その特徴を明らかにする。第二に、大坂歴史博のコレクションを素材として、江戸同様に大坂における引札の様式論的特徴を明らかにする。第三に、以上を踏まえ、江戸・大坂の引札の比較をとおして両都市における特徴を明らかにし、そのことをとおして従来の広告史では得られなかった新知見をもたらすことを目的としたい。

地方都市における近世期の引札の残存状況は必ずしも多くはないとされている⁽¹⁰⁾。それ故、当時の巨大都市であった江戸と大坂の特質の究明を行い、それに基づきながら地方都市における分析を進めるのが順序として妥当であろう。本稿は引札の全国的分析を進めるにあたり、基礎的な第一歩としての位置を占める。

① 本稿における引札分析の前提

(1) 引札の収集と作成

分析の前提として、なぜ『諸屑』において特に引札が数多く収集し、貼り交ぜられたのか、その理由について考察することとしたい。まず考えられるのは、扇藏の個人的資質として強い収集癖があったという点が挙げられる。

次に考えられるのが落語等の創作活動にあたり、その発想の源泉として収集していた可能性のある点である。本件を巡って参考となるのが、幕末～明治の戯作者である河竹黙阿弥（一八一六～一八九三）の事例である⁽¹¹⁾。彼は嘉永～明治期にかけての印刷物類の収集を趣味とし、具体的には「瓦版の読売、諸国名産物の上包み紙、由来書、或は時事を題材に

して版行された、千種萬様の小出版物―諸番附、見立絵等。または諸商店の広告、引札の類、扱は団扇絵、凝つた模様の手拭等に至るまでの、さまざまの小さな散逸し易い、面白いと思はれ、珍しいと思はれた、ちよいとしたもの」であり、これは『諸屑』での収集物と同じである。「死ぬ前に至つて、『此の張交物を整頓して、帖に仕立てられないのが残念だ』という意向を持っていたようで、実現していれば、『諸屑』のように黙阿弥独自の基準によって整理・分類された貼交帳が編集された可能性があったことになる。

当時の戯作者は引札の文章を美文・戯文風に執筆することを副業とする他、およそ文筆に関わることを全てに携わっていたとしても過言ではなかった。例えば「代作屋代作」こと花笠文京（一七八五～一八六〇）も狂言作者・戯作者であるが、同時に多種多様な文章・文芸作品作成の請負はもとより、引札の文案作成をはじめとした出版活動に関わることも全般を生業としていた⁽¹²⁾。

河竹黙阿弥もその例に漏れず、引札の文案作成を請け負っていたが、その際に次のような条件を付したとされる。「別に謝礼などには及ばない、引札さへ呉れ、ばよいが、紙は上等のにして貰ひたい（中略）漢字交りで、楷書で、仮名付きの萬人に読易いやうに、との注文であった。彫りをよく、摺りをよくとの注文も、必ず付け加へた」というのである。黙阿弥にあつては、引札を作成する行為は金銭上の価値よりもむしろ純粹に創作活動上の刺激を得ることに喜びを見出していた。さらに、文案を練るにとどまらず、画面構成や読み易さ、彫りや摺りにまで配慮し、不特定多数の人々の目に触れることに意を注いでいたことになる。

いわば「読まれる」ことに加え、「見られる」ことを意識していたことが読み解ける。黙阿弥にとつての引札制作は、視覚伝達媒体の総括監督（総合プロデューサー）的能力を涵養するという意味合いがあつたことになり、全ての創作活動の質的向上を図るためのトレーニング的性格を

有していたといえよう。

このことは『諸屑』にもそのまま適用し得るものと判断される。様々な印刷物を「書写」するのではなく、実物をそのまま「貼る」という行為に扇藏こだわったのは、それぞれの印刷物の文章はもとより、全体の画面構成、視覚効果、使用している料紙の風合いも含め、それらを全て帳面という形でカタログ的に保存することで、自身の審美眼を養う点に主眼があったと捉えられるのである。

以上を前提とすると、引札に記された文章そのものにとどまらず、画面構成等を含めた様式論的視点、換言すれば古文書学的視点からの分析が不可欠ということになるのである。

(2) 引札の四類型

『諸屑』に収載されている引札は多岐にわたるため、最初から独自に分類を編み出すことは困難である。そこで既存研究における分類法を検討し、それに基づきながら様式分析を行うこととしたい。管見の限り、引札を分類したものととして谷峯藏氏の著作が挙げられ、同氏は引札を大きく次の三類型に分類している。¹⁴⁾「実用商用文型」・「戯文コピー型」・「プレイスカード型」の引札である。

「実用商用文型」はコピーの原点とされ、実用文と商用文から成る。¹⁵⁾前者は冗語を廃した現在の社告に相当する文章で、いわばビジネスライク的な文章である。後者は挨拶文言等が入った文章で、天明期(一七八一〜九)以降から盛んになったと目されている。後述のとおり、引札の文章が手紙の書式となり、その中で商品等を宣伝したものである。「戯文コピー型」は戯作者が作者(コピーライター)となり、洒落のめかした表現を用いながら宣伝したものである。「プレイスカード型」は店で取り扱う商品の銘柄や値段表を簡条書や一覽表形式で宣伝したものである。

谷氏が提起した分類の妥当性を検証するため、近世における引札の認識について考察をしたい。次に掲げる【資料1】は先述した代作屋代作こと花笠文京が請け負っている文筆分野を列挙した引札である。¹⁶⁾

【資料1】

御誂文作認所 代作屋代作
御認物取次所 文飛堂文飛
一 神仏開帳縁起類

神道両部・浮屠方便・靈宝のゆらい等にい
たるまで国史・神書・経文のうちより考証
仕候

一 諸商売開店御披露 新規新工ふう・再興・四季をりくの引札
一通りの文段ハもちろん、狂文にもした、
め申候

一 珍物見世物口上 生るい・乾ぶつ造もの・神羅萬象真偽二か、
わらず、其品と其物ニよりまことしやかに
弁舌仕候

一 売薬能書引札類 丸散・丹円・かうやく・和漢秘方の伝来書・
あんもんの長短、御好ミ次第第二仕候
(以下、その他の請負分野が書き上げられている部分は省略)

【資料1】で注目されるのは、一つ書の二・四条目部分において、御披露・売薬能書が挙げられているが、これらは後に触れるとおり、いずれも引札のことを指す点である。四箇条の半分を引札が占めていることとなり、それだけ花笠文京にとって数ある文筆制作請負活動の中でも最重要視されていったといえる。

この点を踏まえ、先述した谷氏による引札分類と【資料1】における近世期当時のそれとを比較対照させると次のとおりとなる。まず二条目の「一 諸商売開店御披露 新規新工ふう・再興・四季をりく」を目的として作成・配布される引札は「一通りの文段」と「狂文にもした、め

申候」の二種類あることになる。前者は「一通り」とあるとおり定型的な書式を意味し、これは「実用商用文型」引札に合致する特徴である。後者の「狂文」は、まさに戯作的な文章を意味し、これは「戯文コピー型」引札に該当する。

一方、四条目の「一売薬能書引札類 丸散・丹円・かうやく・和漢秘方の伝来書・あんもんの長短、御好ミ次第第二仕候」については、先の三類型に入っていない。薬の効能書を広告化したものが、当時にあつては主要な引札の分野であつたと考えられる。花笠文京は【資料1】とは別に、請け負っている文筆物の分野を【資料2】の引札に書き上げている。⁽¹⁷⁾

【資料2】

御詠文作認処

代作屋大作

一 歳旦春興御摺物 誹諧 発句 狂歌

○其道々の判者、宗匠達の添作を経て、校正仕、差上申候

一 売薬能書引札類 丸散丹円 膏薬

○和漢秘方の伝来書、案文の長短御好次第に仕候

一 諸商売開店御披露 新規 新工夫 再興

○四季折々の引札、一通の文段は勿論、狂文にも認申候

一 神仏開帳縁起類 神道 両部 浮屠 方便

○靈宝の由来等に至るまで、国史、神書、経文の中より考証仕候

一 珍物見世物口上 生類 乾物 進物 森羅万象

○真偽に不拘して、其物と其品二因、誠しやかに弁舌仕候

(以下、その他の請負分野が書き上げられている部分は省略)

右にあつて、二・三条目が引札に該当する。順序は前後するが、三条目の「諸商売開店御披露 新規 新工夫・再興」・「一通の文段」は【資料1】同様「実用商用文型」に、同「狂文にも認申候」は「戯作コピー型」

にそれぞれ相当する。ここでも谷氏の分類は妥当性があると認められる。二条目の「売薬能書引札類」とは、薬の効能書のことを指し、【資料1】同様に【資料2】にあつても、それが引札の重要分野と認識されていることが分かる。したがって、先の三類型に加え、四類型目として「効能書型」引札を新分類として加えたい。

なお、「プライスカード型」引札は【資料1・2】共に当てはまっていないが、これは同類型そのものに内在する特徴が原因と考えられる。というのも同類型は商品名・値段を簡条書き・一覧表化したものであることから、花笠文京をはじめとした戯作者がそこに関与する余地はない。誰にでも簡単に文案を作成できる様式であり、あえて請負分野として取り上げられなかったであろう。

以上から、本稿にあつては引札をA型「実用商用文型」・B型「戯文コピー型」・C型「効能書型」・D型「プライスカード型」の四類型(以下それぞれ「A型」・B型」・C型」・D型)」に区分し、『諸層』においてこれらに合致する引札を分析対象として取り上げるものである。

既述のとおり、「データベースはく」では六一五点が引札として表示されるが、その中には商標の類や書籍に掲載された広告の切抜が含まれ、商店・商品広告を目的とした現代的な意味での「ちらし」と捉えるには違和感を覚えるものも含まれている。引札の大きさは「紙四つ切り、六つ初り位な大きさに摺つて」とあることを手掛かりに形態・質量上の視点を加味しながら、『諸層』から選出し、結果として一六〇点を引札として見出し、右の四類型に分類した。

無論、これは多分に恣意的な手法であり、必ずしも厳密な基準によるものではないという難点はある。だが、本稿の目的は、大凡の引札の様式的特徴を明らかにすることにあり、次節で述べるとおり、ある程度の傾向性は十分に看取され、行論の展開に支障をきたすものではないと判断される。

② 幕末期の江戸における引札の様式論的特徴

(1) A型「実用商用文型」の引札

まず、A型「実用商用文型」は表1としてまとめた。総数は七三点であり、四類型の中で一番多い。その具体的事例としては表1-25(表1の左端の「番号」欄の数字。以下同)が挙げられる。

【資料6】(写真1)

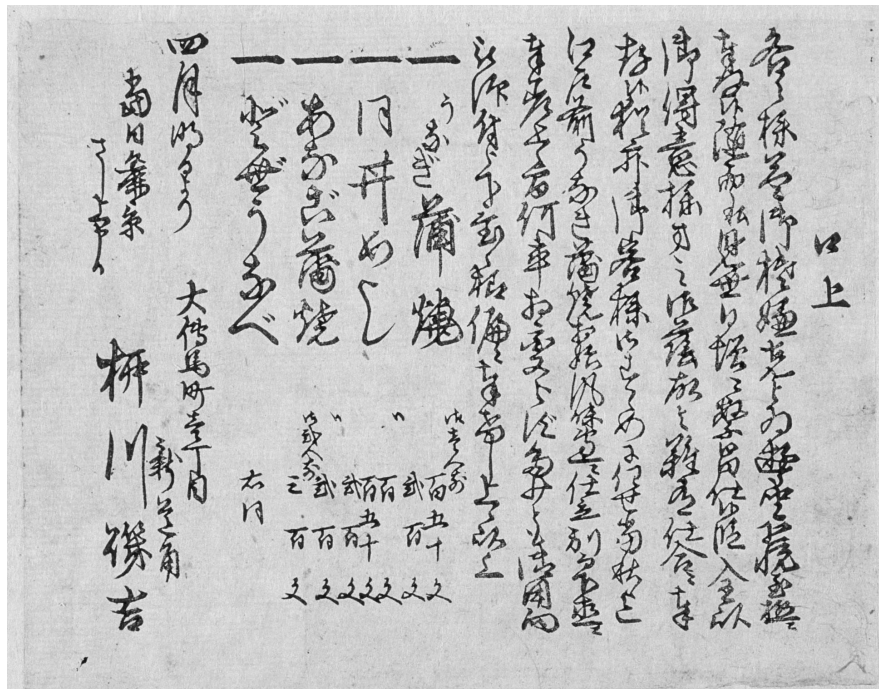
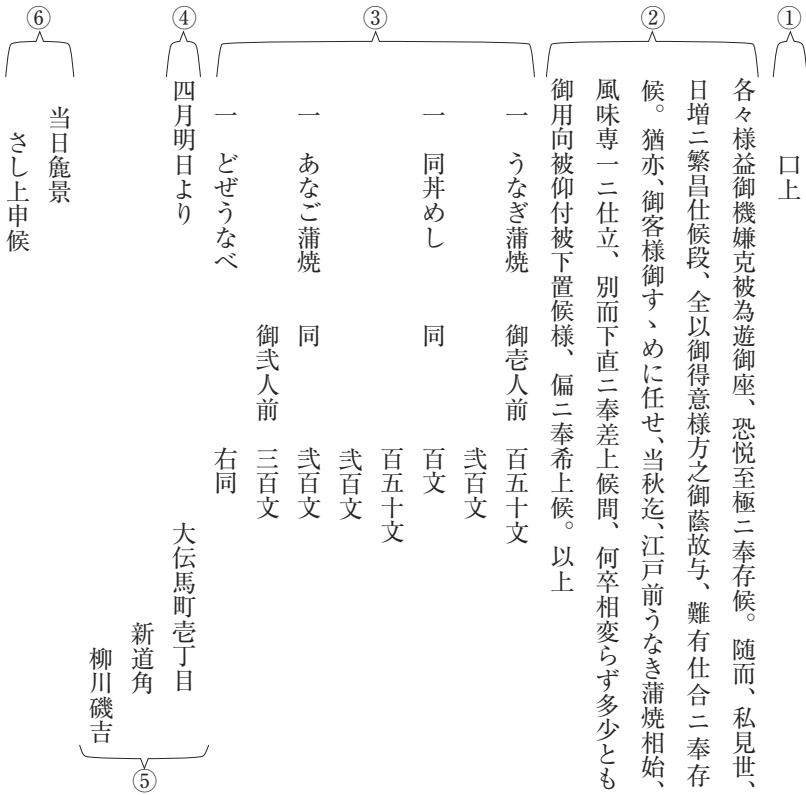


写真1 (国立歴史民俗博物館蔵)

表1 A型(実用商用文型)に分類される『諸屑』の引札

番号	歴博資料番号	店名	日付	業種	冒頭文言	書出文言	書止文言	刷・料紙	図柄	値段・品物表の位置	風景文言
1	H-1492-6-66	両国米沢町三丁目 石井徳兵衛		料理屋(鯉)	口章	春暖之御ニ御座候	以上	色刷	下地に源氏香図		
2	H-1492-6-97	松下亭才助		料理屋(鯉)	御料理	各様方益御機嫌克	以上			本文前	
3	H-1492-6-100	両国 丸升惣兵衛	来ル五月四日見世開	料理屋	口演	御客様方益御機嫌克	以上	色刷			当日風景差上仕候
4	H-1492-2-100	深川黒江町北かわ 近亀改二葉屋亀吉	辰正月日	料理屋(田楽・蒲焼)、店名改変		益々御機嫌克被遊	以上	色刷	下地に桜	本文後	
5	H-1492-2-85	下谷車坂片町 田舎庵大和屋重兵衛	(安政三年)六月十八日	料理屋(蕎麦・うどん・素麺)	御披露	御客様方益御喜元	已上			本文後	当日風景差上申候
6	H-1492-2-4	大門通弥兵衛町 東橋いづや出店いづ熊		料理屋(蒲焼・鯉・鮫等)、出店開店	口演	各様益御機嫌能被遊御座	以上			本文後	当ル明日より当日風景差上申候
7	H-1492-2-153	人形町中程 尾張屋重蔵	五月十五日十六日	料理屋(鯉・どぜう)	口演	一各様方益御機嫌克	以上			本文後	当日風景奉差上候
8	H-1492-8-139	根岸庚申塚前 駒谷文次郎	九月明日より	料理屋(鯉・どぜうなべ)	口上	益御機嫌克	以上			本文後	当日風景さし上申候
9	H-1492-22-27	(店印)横山町三丁目新道山崎屋兼吉	来ル十月日より	料理屋(豆・漬物)	口演	各々様益御機嫌克	以上	色刷	天地に赤線	本文後	当日風景奉差上候
10	H-1492-22-150	馬喰町三丁目中程 煮染屋平五郎	当ル十月ヨリ	料理屋(煮物)	口上	各様益御機嫌能	以上	色刷	天地に赤線	本文後	
11	H-1492-10-35	浅草茅町貳丁目 あやせ	(安政元年)当ル壬七月朔日より	料理屋(天ぷら・茶漬)		各様ますます御機嫌克	以上	色刷	竹図	本文後	当日風景奉さし上申候
12	H-1492-17-22	四ッ谷大木戸際 八幡屋喜三郎	辰 十一月	料理屋(茶漬)	乍憚り口上書奉申上候	各々様方益御機嫌能	以上			本文後	
13	H-1492-19-25	元大坂町 い勢屋 又五郎	二月廿八日	料理屋(蕎麦)	舌代	いよいよ春暖	以上		袖に行灯招牌図		みせひらき当日風景差上申候
14	H-1492-22-94	両国薬研堀 寿庵猪太郎	八月八日より	料理屋(蕎麦)	乍憚り口上書御披露奉申上候	一各々様方益御機嫌能	奉希候			本文後	当日風景差上候
15	H-1492-22-153	高砂町 東里庵	十月明日より	料理屋(蕎麦)	口演	益御機嫌克	已上	色刷	天に赤線	本文後	
16	H-1492-25-68	入谷 松下亭	辰十一月	料理屋(蕎麦)		毎月晦日計り並蕎麦売出し仕候 口上	以上				
17	H-1492-2-119	根岸御行之松東之方 養老改 養松庵喜三郎	二月廿五日より	料理屋(蕎麦 店名改変)	口章	春暖之御	ゆるしねかし松夢老翁戯云々		奥に店の旗	本文後	
18	H-1492-13-29	両国廣小路吉川丁 さかいや岩吉		料理屋(寿司)	乍憚り口上	各様方益御機嫌能	以上				
19	H-1492-13-92	京ばし中通り常盤町 上方の齊六		料理屋(寿司)		御町中様益御機嫌よく	奉希上候	柿洪色の紙	下側に亭主図		

20	H-1492-6-120	両国米沢町三丁目新道角 中川喜三郎	明日より	料理屋 (汁粉・ ぞうに)		此頃世界の	奉待候	色刷		本文後	当日鹿景さ し上候
21	H-1492-19-76	南茅場町 玉川堂	例年之通 二月朔日 売出し	料理屋 (汁粉・菓 子等)	口演	一益御機嫌 克	以上		葉の形の 枠内に品 名表	本文後	当日鹿景奉 さし上候
22	H-1492-19-109	東両国 大和田	午四月廿 二日廿三 日	料理屋 (蒲焼・ どぜう)	口上	向署之御	以上	色刷	月に植物 図	本文後	当日鹿景差 上申候
23	H-1492-2-247	御厩川岸 魚吉	九月明日 より	料理屋 (蒲焼、 どぜうなべ)	口演	秋冷相催候 得共	以上	色刷	天地に赤 線		
24	H-1492-22-154	御蒲焼所 馬喰町式丁目 柏屋九兵衛	当五月廿 五日より	料理屋 (蒲焼)	口演	一向署之御	以上	色刷	天に赤線		当日鹿景呈 上
25	H-1492-25-67	大伝馬町壱丁目新道角 柳川磯吉	四月明日 より	料理屋 (蒲焼)	口上	各々様益御 機嫌克	以上			本文後	当日鹿景さ し上申候
26	H-1492-19-24	本所みどり町三丁目 日の出 直右衛門	三月	料理屋 (菓子)	口演	春和之節	以上	色刷	天地に赤 線	本文後	当日鹿景さ し上申候
27	H-1492-19-122	浅草雷門前 大橋藤原吉光	(手書「慶 応辰」)七 月明日より	料理屋 (菓子)	口演	各々様益御 機嫌克	以上	色刷	品名に枠 線	本文後	当日鹿景さ し上申候
28	H-1492-25-88	住吉町 水月堂		料理屋 (菓子)	乍憚り口 上書奉申 上候	一各様益御 機嫌克	以上			本文後	当日鹿景差 上申候
29	H-1492-11-16	御厩川岸三好町 昇月	文月明日 より	料理屋(会 席、菓子)		以御蔭	奉希上候	色刷		本文後	
30	H-1492-22-135	両国 丸竹	九月明日 より	料理屋 (あなご さしみ)	口演	各々様益御 機嫌克	以上		品名表に 四角・丸・ 扇型枠	本文後	当日鹿景さ し上候
31	H-1492-19-91	駒形 川升	七月明日 より	料理屋 (あなご がん鴨)	口演	各々様方益 御機嫌克	已上		品名が短 冊・扇型 図の枠	本文後	当日鹿景さ し上候
32	H-1492-22-93	精進 魚類 小桜揚住吉町 横店 高砂屋金蔵		料理屋 (揚げ物)	口演	一各様ます ます御機嫌 能	以上		店に枠	本文後	明日売出し 鹿景さし上 申し候
33	H-1492-17-23	元数奇屋町壱丁目 林氏 塩瀬山城	来ル四月 十日売 出し仕 候	料理屋	口上	各々様益御 機嫌克	以上	色刷	下地に桐 紋図 品名を短 冊風	本文後	当日鹿景奉 さし上候
34	H-1492-21-77	米沢町二丁目 豆腐屋向二日 印御座候 吉野屋はま		料理屋	口演	益御機嫌克	以上	赤色料 紙			
35	H-1492-25-66	上野山下角 中泉 三分亭	極月十日 より	料理屋		御得意様方 益御機嫌能	以上	色刷	天地に赤 線	本文後	当日鹿景呈 上
36	H-1492-2-236	いなり新道出みせ 京橋南 鍛冶町壱丁目 福谷筑前大掾		菓子(新 店開店)		一四方之御 得意様方益 御機嫌克	千拝	色刷	下地は薄 に月		来ル八月明日 より売出し当日 鹿景奉さし上 候其外一番よ り廿五番迄大 景物
37	H-1492-2-265	江戸橋蔵屋しき 栄喜堂	卯八月廿 八日	菓子	口上	各々様御機 嫌克	以上		菓子箱図	本文後	売出し当日 鹿景さし上 申候
38	H-1492-2-108	江戸橋蔵屋敷 栄喜堂	四月廿九 日	菓子 (茶店)	伏裏	各様倍御機 嫌克	以上			本文後	売出し当日 鹿景呈上
39	H-1492-16-24	新吉原江戸町壱丁目角 玉 屋山三郎	嘉永六 癸丑十二 月	茶屋開店	口上	甚寒之御二	以上			本文後	

40	H-1492-2-76	芝神明町西江入北がハ中程 賀茂川	月日	茶店開店	口上	やつがれ年頃	以上					
41	H-1492-17-84	播州赤穂塩売捌所 富澤町 つき 大門通弥兵衛町 三河屋重兵衛	十一月明日より	酒・味醂	今般諸品相改御進物巻樽御好次第現金銘酒古味淋樽割下直ニ奉差上候 口演	冷気相増	以上		値段表は棹囲い	本文後	当日風景差上申候	
42	H-1492-25-14	(店印) 浅草福富町出店 下谷広徳寺前 池田屋半兵衛	辰九月廿五日売出し仕候	酒	乍憚り口上書御披露仕候	秋冷之節	以上		値段表に棹	本文後	当日風景呈上	
43	H-1492-9-61	上野南大門町 湯屋友蔵	巳六月明日より	湯屋開店	口上	益御機嫌能	以上					
44	H-1492-13-31	日光道中幸手仲町 木むら市太郎	とらの六月	旅宿開業	口序	各様益御清福	不宜					
45	H-1492-2-134	日光道中小山宿御□□脇本陣 角屋三郎左衛門 →御やうし	月日	宿	口上	各々様益御機嫌克	以上					
46	H-1492-5-183	新吉原角町入口 松田屋家寿		遊郭	細身正札附 遊女大安売	御客様方益御機嫌克	以上		袖に店暖簾図			
47	H-1492-6-102	新吉原角町入口 松田屋家寿		遊郭	細身正札附 遊女大安売	御客様方益御機嫌克	以上		袖に店暖簾図			
48	H-1492-16-53	手挽町山分ヶ通り 売女屋角四郎		遊女	無紛地物類大安売仕候 乍憚り口上書を以御披露奉申上候	追日寒冷相増	以上		奥に暖簾図	本文後		
49	H-1492-6-65	新吉原江戸町壱町目 大黒屋文四郎	寅五月十日より	遊女	口上	御客様方倍御機嫌克	已上	色刷	下地に紋・源氏香			
50	H-1492-13-39	新吉田町 矢的屋弓之助	月日	遊女	現金かけねなし 辻君大安売	一御客様方益御機嫌能	以上		袖に暖簾図	本文後		
51	H-1492-2-111	深川七場所出張仮宅屋売太郎、浅草山の宿花川戸町本家老乱屋新造		遊郭新装開店	御披露	御客様方益御機嫌	以上	色刷	冒頭に旗と招牌、手紙後に値段表、下地に商号			
52	H-1492-6-113	新吉原江戸町壱丁目角 玉屋山三郎	丑十二月	遊郭	口上	甚寒之砌ニ	以上			本文後		
53	H-1492-6-148	新吉原京町二丁目 金沢屋庄助	月日	遊郭	京町二丁目左側四軒目現金正札附 遊女大安売	御客様方益御機嫌能	已上		袖に店暖簾図	本文後		
54	H-1492-6-155	新吉原角町 万字屋茂吉	月日	遊郭	現金引手なし 遊女大安売	一御客様方益御機嫌克	以上		袖に店暖簾図	本文後		
55	H-1492-2-73	座ぬしかつら文吾、世話人はなし惣連中	辰の二月	寄席	たつととし新たにものせし落とはなしの披露	益々御機嫌克被入	奉希上候	色刷	冒頭に嘶家が頭を下げる図			
56	H-1492-2-77	本所みとり町三丁目 日の出直右衛門	月日(安政三年)	寄席普請出来	口演	春暖之砌	以上				当日そける以差上申候	

57	H-1492-2-210	むらく		持芸鳴物披露	伏拝	鳳君様方益御機嫌	むらく額突て申上					
58	H-1492-2-75	吾妻路二代目富士太夫		催し・会合	当ル四月廿四日ゆかびらき							
59	H-1492-2-137	本町二丁目 いと屋連中郎		端唄興行	けん気性浮附端唄大流行	世上御通客様	以上	色刷	奥に店の暖簾			床びらき定日美声はり上申候
60	H-1492-19-26	御業所 江戸両国やげんほり 四ツ目屋忠兵衛	月日	薬、道具	口上	一私見せ之	以上		上に暖簾図	本文後		
61	H-1492-2-1	本郷二丁目 古賀屋勝五郎		化粧品(すずめ香、おしろい)薬(牛肉丸)	口演	益々御機嫌よく被御座大慶至極奉恐賀候	以上	色刷	団扇の意匠			
62	H-1492-23-38	人形町通り 喜久寿福太郎	当三月廿一日廿二日	化粧品	口章	ますます御機嫌能	奉希候	色刷	品名に枠線	本文後		鹿景呈上仕候
63	H-1492-3-181	成駒屋児雀		化粧具		先年御当地	奉希候	色刷	下地に座紋			
64	H-1492-9-87	遠州見附西坂町 古田屋源六		呉服・反物・足袋	(看板図)現金かけねなし大安売仕候駄おろし	一私見せ之儀	以上		袖に看板図			
65	H-1492-25-92	江戸上野広小路角 いたう松坂屋利兵衛	辰九月	呉服・太物	九月廿八日見世開売初仕候 乍恐口上書を以奉申上候	益御機嫌能	以上		店印図			そしな文言下値
66	H-1492-2-264	新橋尾張町 糸ひすや勘左衛門	辰三月	呉服・反物	口上	益御機嫌能	以上		奥に店暖簾図			
67	H-1492-4-313	古河石丁角 小倉屋紋三郎		太物	(店印)現金緒太物品々正札附大安売	各々様方益御機嫌能	奉希上候		表題が暖簾			
68	H-1492-25-15	深川一ノ鳥居出店 京橋具足町通木戸きわ 大野屋清五郎		股引 手甲 腹掛 脚絆	口上	益御機嫌能	奉願上候		看板図	本文後		
69	H-1492-13-95	神田鍋町 玉屋弥兵衛	二月廿六日	股引 足袋	口章	益御機嫌能	以上		足袋型の枠			当日鹿景さし上申候
70	H-1492-2-255	本家 てりふり町 宮田忠蔵	月日	履物・傘	乍恐口上書ヲ御披露奉申上候	私見せノ儀	以上		天に店暖簾図			
71	H-1492-4-491	上州吉井 本家中野屋孫三郎 女作、本船町通江戸橋キハ 上州屋周蔵		火打石	御目印(店印)上州吉井本家中野屋孫三郎女作	右 上州吉井本家火打石	以上		商品を図化			
72	H-1492-2-127	御煙管所 草黒船町 総本店文星堂 浅草 村田小兵衛	(安政三年カ)	煙草	-	一各々様益御機嫌能	以上			本文後		当月十六日十七日十八日売出し鹿景呈上仕候
73	H-1492-2-79	出玉ヶ池通り紺屋町代地井戸きハ床見世二而 菊屋清治郎	(安政三年)四月廿四日より	豆	口上	一各々様大地しんの節	以上					

本資料の全体構成は、①冒頭文言、②本文、③値段表・品物表、④日付、⑤差出（引札を発行した店名）、⑥風景文言から成り、引札全体の画面構成は右側から①～⑥の数字順に配置されている。

A型を使用する業種として、表1から多い順に掲出すると、料理屋の引札が三五点、遊郭（遊女）が九点、寄席等の興行案内が五点、呉服・太物が四点、菓子店が三点、化粧品が三点、茶店が二点、酒店が二点、旅宿が二点、股引が二点となっている。大凡の傾向として、小売商的な業種は少なく、顧客を座敷に上げて、飲食・宿泊・興行・性等の様々なサービスを一定時間にわたり提供する業種が多いことが指摘できる。とりわけ飲食に関係する業種が突出しており、料理・菓子・茶・酒の総計で四二点、A型全体五七・五%（小数点第二位を四捨五入。以下同）と半数以上を占めている。

続いて、画面構成の要素ごとに分解し、それぞれの特徴を明らかにしたい。

①冒頭文言については、大きく三類型に分けることが出来る。第一に、「口上」や「口演」等のように、本来は口頭によって伝達していた内容を文書化したことを表示する文言である。具体的には「口上」が一六点、「口演」も一五点、「口章」が四点、「御披露」が二点、「舌代」・「伏菓」・「伏拝」・「口序」がそれぞれ一点で、総計四一点となり、A型全体五六・二%を占める。

第二に、「乍憚口上書奉申上候」のように、文言は幾分異なるにせよ、訴願文書類の書き出しと同じものが八点である。この場合も「口上書」という文言が含まれていることから、第一の分類と同様に、口頭伝達の内容を文書化したものという意味合いが付与されている。

第三に、「現金緒太物品々 正札附大安売」（表1一六七）や「現金かけねなし 辻君大安売」（表1一五〇）のように、売り出す商品やサービスを冒頭に明示する形式の文言である。これは一一点ある。第一・第

二の分類は、表題だけでは引札全体の内容を把握し得ないのに対し、第三の分類は表題の文言だけで、引札の内容全体を知り得る点に特徴がある。

ただ、A型の全体的傾向としては、第三の分類は一五・一%と少数派であるのに対し、第一・第二の分類は七四・〇%と多数を占める。したがってA型全体としては、冒頭文言だけでは引札の内容は即座に判断できず、それを把握するためにはある程度、本文を読解する必要のある形式といえる。

②本文については、その冒頭の書出文言と末尾の書止文言それぞれの特徴について次に述べる。書出文言は、その殆どが「冷気相増」・「春暖之候」等のように時候の挨拶文、また「各々様益御機嫌克」のような御機嫌伺いの定型文で占められている。ほぼ例外はなく、上記に類する文言から書き始められ、書式の定型化・定式化が著しい部分である。書止文言も同様で、「以上（已上）」が殆どである。本文の冒頭と末尾は手紙文の形式に則った書式であるのがA型の特徴である。

③値段表・品名表については、【資料3】のとおり、その店で扱う商品類の値段や品物を簡条書で列挙したもので、A型では四〇点、全体の五四・八%とほぼ半数が存在する。表1の「値段・品物表の位置」欄は、この③の配置される場所について、すなわち②本文の前（右側）・後（左側）を一覧化したものである。これは三九点が後であり、【資料3】のような配置となっている。品名表があるものの中の九七・五%が本文後となり、A型の情報配置の仕方は本文を読み込むことを前提としたものといえる。別言すれば、手紙文の中に値段や品名等の商品情報が組み込まれた書式である。

④日付について、明記されているものは四一点、全体の五六・一%となり、半数以上である（「月日」としか書かれていないものは除く。以下同）。よって、A型はある程度、日付を明示する傾向にある。関連して、

開店披露や新規メニューの提供など、そのサービスが開始されるのが何時なのかを明示した文言がA型には散見される。具体的には「明日」「明日より」としたものが散見され、日付部分に「七月明日より」（表1-1-31）としたもの、⑥（後述）の部分に「明日売出し儼景さし上申し候」（表1-1-32）と記載されている。表1では「明日」としたものが一〇点確認され、「本日」「今日」としたものは一例も存在しなかった。そこで本稿では、あるサービスの提供日を「明日」と表記したものを「明日文言」と呼称することとする。同文言の存在がA型の特徴である。

⑤ 差出は引札の発行者・発行店の名・名称が記される部分である。様式的にはこの差出と宛所が明記されるのが手紙文の礼法であるが、A型を含め、引札の多くには差出はあっても宛所書は存在しない。②冒頭文言で提示したとおり、書出文言に「各様」や「御客様方」のような宛所に相当する文言が明示されていること、また、不特定多数に配布され個別具体的な宛所名を記載することの困難性から、宛所不記載が引札の様式的特徴となったと考えられる。

⑥ 儼景文言とは、来店時に景品等の何らかの特典サービスが付されることが明示された文言のこと、「みせひらき当日儼景差上申候」（表1-1-33）のように表記される。この文言の配置場所は【資料3】のとおり文書の奥（左隅上）である。儼景文言は三三点が確認され、全体の四五・二%とおよそ半数に相当する。表1において儼景の具体的な内容について触れられたものはないが、その店の広告名が入った団扇等のノベルティグッズ類だったと想定される^⑩。

以上は引札の文字情報についての分析であるが、視覚効果的要素については、表1の「刷・料紙」欄と「図柄」欄をそれぞれ参照いただきたい。「刷・料紙」について、単なる墨（白黒）印刷でなく、他の色も合わせ用いた色刷（カラー印刷）は二四点。通常のクリーム色の紙ではなく、赤色等の料紙に印刷をしたものが二点（表1-1-9・三四）。「図柄」

については、店の招牌（看板）や目印の旗の図柄を掲出した凝ったものも見受けられるが（表1-1-31・37）、色刷の中、天地に赤色の線を引ただけの単純な図柄のものも七点存在する。後述のB型よりは視覚効果に意を払ったものではない。総じて文字・文章内容を主体としたのがA型の特徴といえる。

（2）B型「戯文コピー型」の引札

B型「戯文コピー型」の引札は表2としてまとめた。総数は三七点で、四類型の中ではA型に次いで多い。その具体的事例としては表2-1-12が挙げられる。

【資料4】（写真2）

① 口章

御客様かた御機嫌もよい初ばるにあらむ。顔老舗の多かる中へ、小店の上でありふれた、鮭の味さへ手際さへ、及バぬ亀のじんだながら、只御恵を力ぐさ、偏にねがふ御光臨、猶萬端に心配て成丈御口に愛相の、悪い所はおしかり請、精々念を人物まで、御意に家内の繁昌を、希ふ主の口真似して
梅素亭玄魚述

② ちらし五もく 御すし 製方

卯の花づけ 御好次第

笹まき

并鮭

鯛のきみ漬

土ひん付

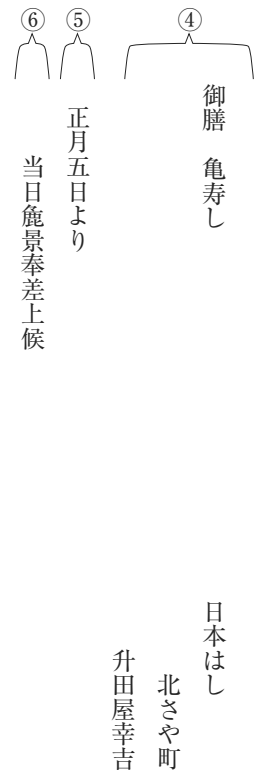
精進すし

出前

其外

百文より

御重詰御折詰御好次第



本資料の全体構成は、①冒頭文言、②本文、③値段表・品物表、④差出（引札を発行した店名）、⑤日付、⑥亀景文言、⑦戯作者から成り、引札全体の画面構成はA型同様に右側から①～⑦の数字順に配置されている。A型と異なるのは、引札の文案を作成した⑦戯作者の名前が記載される箇所が追加されている点である。

B型を使用する業種として、表2から多い順に掲出すると、料理屋が二一点、菓子六点、茶屋が三点、遊女屋・湯屋（兼料理屋・菓・染物・装身具・小間物・講釈がそれぞれ一点となっている。A型同様に、飲食に関する業種が多く、総計で三一点、B型全体の八三・八％の割合を占めている。

①冒頭文言については、大きく二類型に分けられる。第一は売り出す商品やサービスを明示する形式のもので、例えば「御そば奉公笑文之事」（表2-1四）・「精製佳品桜あられ」（表2-1二六）等が挙げられる。本類型は一三点あり、B型の中では最も多い。割合ではB型全体の三五・一％である。

第二は口頭伝達内容を文書化したことを表示する文言であり、これはA型で主流を占めていたものである。具体的には「伏稟」が五点、「報帖（条）」三点、「口演」二点、「御披露」二点、「口上」二点、「乍憚口上」二点、「口章」・「換舌」はそれぞれ一点である。総計一八点で、B型全体の四八・六％となる。

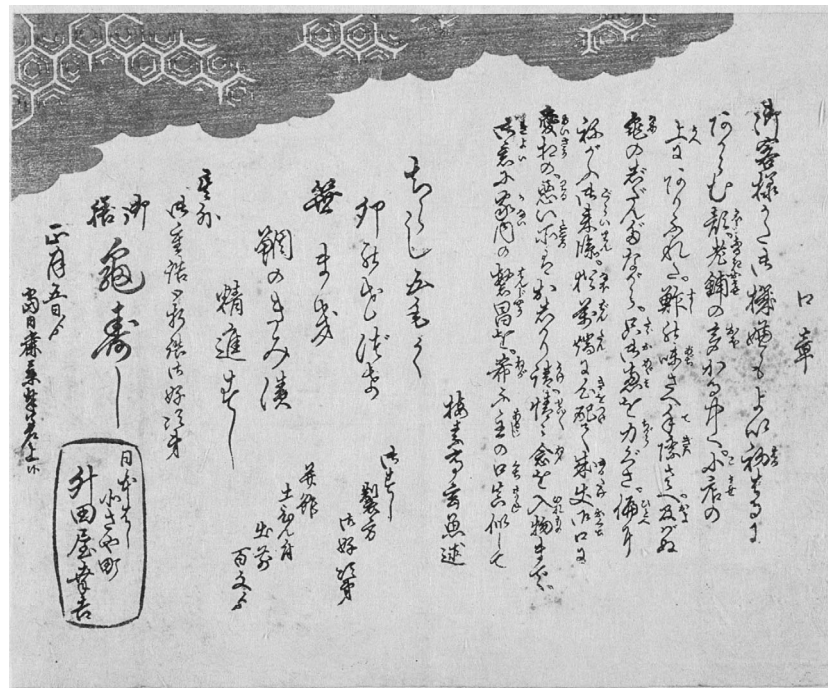


写真2 (国立歴史民俗博物館蔵)

表2 B型(戯文コピー型)に分類される『諸屑』の引札

番号	歴博資料番号	店名	戯作者	日付	業種	冒頭文言	書出文言	書止文言	刷・料紙	図柄	値段・品物表の位置	僉景文言
1	H-1492-22-45	両国薬研堀 高田屋弥助	古人林屋正蔵		料理屋 (鰻 どぜう)	口上	一此当り目	あるし二代り 古人林屋正蔵 之口調ニ習て 伏して申			本文後	当日僉景さ し上申候
2	H-1492-2-99	山崎の渡場を左 へとりてといふ道 なしぬ 山之宿 の町へ入北へ向 て、左側の中ほど いろは屋葛芳	柳下亭種員 述		料理屋 (肴料 理)、新 店開き	報帖	嘉肴ありと	主人に代て柳 下亭種員述	色刷	冒頭に「忠臣 蔵御茶漬」、 値段表の後に 大石蔵之助の 絵、下地に二 つ巴紋	本文後	来ル二月 七日より 新見世ひ らき仕候
3	H-1492-2-2	はし場わたしば 鴨花亭	桜素亭玄魚 しるす		料理屋 (蕎麦)、 新装開店	口条	一陽来復の旦 より	御貴臨の程希 ふよしを	色刷	地に鳥、末尾 に店の旗印		
4	H-1492-6-60	馬喰町荳丁目 鴨なんばん伊勢 屋藤七	応需 万亭 應買述	九月廿八 日より売 初め	料理屋 (蕎麦)	御そば奉公笑 文之事	一此そばと申者	仍而笑文九段 の如し		店内の図 額内に値段 表		うりぞめ当 日僉景さ し上申候
5	H-1492-17-41	浅草す八町 万年屋重助	玄魚(画)	十月明日 より売出 し仕候	料理屋 (豆・寿 司)	煮豆類売出し 口上	益御機嫌克	以上		お面図ほか、 看板の値段 表	本文後	当日僉景 奉差上申 候
6	H-1492-6-105	浅草新高町宝 せん寺門前 和泉屋栄吉	戯作者 鈴 亭谷峨戯述	寅 三月 二日 み せ開キ	料理屋 (蕎麦・ 天ぷら)	口演	蕎麦切素麺喰 たいなど	以上			本文後	
7	H-1492-3-80	下谷いりやの里 松下亭	重宣筆		料理屋 (蕎麦)	蘭麵生蕎麦売 出シの伏裏	一昨年以来	四方を仰て囀 るになむ	色刷	大根の絵な ど	本文後	
8	H-1492-6-132	本郷蘭麵同店 松下亭	玉峰画	来ル六月 六日より	料理屋 (蕎麦)	極製蕎麦切御 披露の伏裏		伏して願ふ	色刷	籠に大根図	本文後	見世ひらき 当日僉景 さし上申候
9	H-1492-13-48	下谷入家の里 松下亭	松亭金水	十月明日 より売出 し仕候	料理屋 (蕎麦)	蘭麵生蕎麦口 演	門に冠りの	例の松亭金水 欽白	色刷	波模様図	本文後	
10	H-1492-2-161	浅草駒形町東 側みさごずし	笠亭仙果謹白		料理屋 (寿司)	乍憚口上	関々たる	主人箱惣に代 りて笠亭仙果 謹白	色刷	下地に商号	本文後	来ル廿一 日売出し 当日僉景 呈上仕候
11	H-1492-8-132	本所松井町式 丁目川岸通り 魚見 寿し金蔵	林屋正蔵述		料理屋 (寿司)	魚見すしの報 条	往古の物語	主人に替りて 敬白			本文後	当日僉景 差上申候
12	H-1492-19-67	日本はし北さ や町升田屋幸 吉	梅素亭玄魚述	正月五日 より	料理屋 (寿司)	口章	御客様かた	主の口ほ似し て梅素亭玄魚 述	色刷	下地に雲図	本文後	当日僉景 奉差上候
13	H-1492-22-152	浅草田町荳丁 目土手下 小林 屋松五郎	両国賞梅亭 このミ述		料理屋 (寿司)	伏裏	米の飯に	以上			本文後	当日僉景 呈上
14	H-1492-22-163	元鳥越かた町 和泉屋拾五郎	あるじに代り て林家正蔵 述	十二月廿 三日みせ ひらき	料理屋 (蒲焼)		見渡せば	じやナア			本文後	
15	H-1492-2-118	本小田原町新 道尾張屋鉄次 郎	江戸前の市 隠 柳下亭 種員なり		料理屋 (鰻、 どぜう)	報条	鰻鱺に江戸産 と	引札にて的当 なる江戸前の 市隠柳下亭種 員なり				卯五月明 日より見 せひらき 当日多景 差上申候
16	H-1492-6-57	八王子新町東 裏玉川源左衛 門	あるじにか はりて花笠 文京述	寅の阜月 吉辰	料理屋 (鰻)	御披露	玉川の流ハ	以上			本文後	
17	H-1492-3-154	神田柳原新地 柳向菴	梅素亭玄魚 述	(慶応元年) 閏五月七日 より	料理屋 (うどん・ 蕎麦)	温鈍蕎麦開店 御披露	花の都に	ねがふ耳なむ			本文後	
18	H-1492-2-101	深川やくら下 百川徳兵衛	禿池述	五月十九 日より	料理屋	換舌	いにしへの	あるしにか はりて禿池 述	色刷	下地に水引		

19	H-1492-3-163	金龍山雷神門前角 かめ屋	河竹其水記		料理屋	報条	金龍山の	八重に一重にねがふにこそ	色刷	下地に亀甲模様		来二月廿四日より売出し当日風景差上申候
20	H-1492-20-18	料理人 なべ千改 亀屋千吉	応需桜川善孝戯述		料理屋	口演	各様益御機嫌能	以上	赤色料紙		本文後	
21	H-1492-25-21	浅草田町二丁目当時南馬道飯宅千成文蔵敬白	主人に代りて小男鹿の妻恋坂に住る鈍亭魯文述	来六月日みせひらき	料理屋	御披露	一瓢の酒に	ねぎまつるになむ		袖に店外観		
22	H-1492-2-183	小梅二ツ出橋向大笑楼	(印)	戌の水奈月	湯屋・料理屋	長寿風呂御湯治所	小梅といへば	主人に代りて筆を採(印)	色刷	下地に植物の図?	冒頭文言後・本文後	明日より三日の間風景呈上
23	H-1492-2-8	京橋やなき町柳玉庵	京橋銀三の市隠三代目十返舎一九申ス		菓子(汁粉)	伏菓	各々様方益々御機嫌能	口やかましく囁るものハ京橋銀三の市隠三代目十返舎一九申ス				来未五月明日より売出し申候当日風景さし上候
24	H-1492-3-29	大阪戎橋北詰少シ東南側 小倉庵	寿海老一子福者白猿		菓子	東都羹子餅并二即席御料理御披露		今の主に代りて寿海老一子福者白猿	色刷	下地に紅葉	本文後	
25	H-1492-10-34	飯倉片町 三河屋平八	柳下亭種員	卯八月晦日みせ開	菓子	伏菓	三井寺に	主人に代りて拙文をやつとことと円る者は柳下亭種員			本文前	当日風景奉さし上候
26	H-1492-13-27	両国元柳橋裏通桜新道 櫻川堂三孝	柳下亭種員	当正月廿八日売初仕候	菓子	精製佳品桜あられ	柳桜ひ	桜川が需に応じて柳下亭種員是を述るなり				
27	H-1492-20-19	雷神門出見世船橋屋織江	鈍亭魯文述	巳九月明日より	菓子	伏菓	故きを温て	甘口になん	色刷	船・橋図値段表枠	本文後	当日風景差上候
28	H-1492-22-52	本郷春木町三丁目角 たからや桃太郎	戯作者 万亭應賀述		菓子	新製 桃太郎飴 御披露の伏菓	昔むかしそのむかし	使をまかせて筆をとる戯作者万亭應賀述				
29	H-1492-10-24	両国広小路の棒手振宝田万作業研堀ニ而元より齋宮太夫之隣家南京亭	宝田万作	当七月二日見世開仕候	茶屋開店	乍憚り口上書奉申上申ス	各様御存之通り	あるじにかわりて申者ハ両国広小路の棒手振 宝田万作				当日風景呈上仕候
30	H-1492-20-1	神田はたご町式丁目 元講武所のいなり前 花野屋	(花園) 記	七月一日みせひらき	茶店開店	御まちあひ開廊の票白	四方の眺ある	ねがふ	色刷	下地に桐図		
31	H-1492-2-166	下谷御切手町入谷之口 三芳野卯之助	文花堂山咲述	寅七月十五日	御休所(茶屋カ)	口上	目に青葉山	是もおなじく下谷の文俠文花堂山咲述				
32	H-1492-13-89	松田屋	鈍亭魯文述、一盛齊芳直画	嘉永七寅初秋	遊女		大尽客の身請	禿を採る		遊郭図		
33	H-1492-2-93	筋違御門外広小路花房丁代地製巧所 松屋仁右衛門欽白	小男鹿の妻恋に住る鈍亭魯文戯述		菓・雑貨	太白堂の主人に代りて伏菓	一双の玉手	御求めをめぐふになん		冒頭に店の絵		
34	H-1492-6-55	北本所番場角青陽軒	花笠外史		染物				色刷	書籍の図奥に店旗図		
35	H-1492-17-48	浅草随神門外鈴木屋政次郎	花笠文京述浪花八代目我童	十月廿四日	装身具	鼈甲櫛簪御披露	夫五重の宝塔ハ	以上	色刷	浅草寺図	本文後に俳句	当日風景差上申候
36	H-1492-9-37	東都人形町通喜久寿福太郎	瓢箪舎	当三月十五日より二日の間	小間物	売出しの拝披	過年の陰冬に	喜久寿堂主人の口代して筆を採るものハ瓢箪舎	色刷	店舗図		そまつながら景物進上仕候
37	H-1492-3-147	会主 桃林亭東山	代摺 文魚述	四月廿二廿三日	軍談講釈	伏菓	治に居て乱を	欲張て白				

口頭伝達内容を文書化した文言である第二の分類が多くを占める点ではA型と共通する。ただ、その内訳を子細に検討すると、A型では一点の使用例でしかなかった「伏裏」がB型では最も用いられ、逆にA型で最も多かった「口上」の使用例がB型では少ない点は対照的である。B型はA型よりも洒落のめかした表現が多く、これは戯作者がコピーライターとして文案作成に携わっていたことに因ると考えられる。

同様に第一の分類についても、引札の内容が一目で分かるようにするための戯作者の工夫と見做し得る。表題のみで引札の内容全体が把握できる文言は先述のとおり、A型では一五・一%であったのに対し、B型では三五・一%である。A型は既存の文章の規範、手紙文の書式に強く規定されているのに対し、B型は戯作者の工夫によりそこからある程度自由な表現が選択されているという特徴が看取される。

②本文については、書出文言については特に定型はなく、むしろそれが特色といえる。書止文言も多様であるが、【資料4】の「御意に家内の繁昌を、希ふ主の口真似して 梅素亭玄魚述」とあるように、④店主の代理として⑦戯作者の名前が記載されるといった、いわば主人代理文言が記載される事例が見受けられる。表2からは一七点の存在が確認されるが、その中、表2-1-1のみは、書止文言ではなく、文書の袖部分(①冒頭文言の右側)に独立して主人代理文言が記されている。

③値段表・品名表については、一九点が確認され、全体の五一・四%と半数を占める。また、その位置も一七点が本文後に位置し、品名表があるものの中の八九・五%を占める。この傾向はA型と同様である。

④日付について、明記されているものは二二点、全体の五九・五%である。明日文言は三点が確認され、今日・本日とした事例は存在しなかった。何れもA型と共通する特徴である。

⑤差出もA型同様である。差出部分に引札発行者・発行店の記載はあるものの、宛所文言は存在しない。

⑥籠景文言は一八点が確認され、B型全体の四八・六%である。A型同様に半数近くの割合で存在することになる。

視覚効果的要素について、表2の「刷・料紙」欄では、色刷が一六点。料紙の色は赤色の料紙を用いたもの一点が確認される(表2-1-20)。図柄そのものについてA型と比較すると、B型では図柄の多様性と共に、図案的にも工夫された点が目立つのが特徴である。A型に見られた天地に色線を引いたもののような単純な図はB型には見られず、図案もより凝ったものとなっている。例えば、【資料4】(写真2)の升田屋の引札では、その店の主力商品が「亀寿し」であることから、下地には亀甲文が色刷りであしらわれているのである。前節で紹介した河竹黙阿弥の事例からすれば、このデザインも戯作者(梅素亭玄魚は図案家として多面的活動を行っていた)²⁰が担当したものと考えられる。以上から、画面のデザイン性を含めた視覚的効果要素はA型よりも重視された様式といえよう。

A型・B型を比較すると、両者共に共通する要素は多い。しかしながら一方で、B型は、戯作者が文案・デザインに携わっていることから、文章形式については定型的な規範からは自由であり、視覚効果的要素についても質的な工夫が見受けられる。A型同様に本文を読み込むことを必要とした、「読まれる」ことを多分に意識しつつも、あわせてデザインとして「見られる」ことにも配慮した様式であるのがB型とまとめられよう。

(3) C型「効能書型」の引札

C型「効能書型」の引札は表3としてまとめた。総数は三一点で、その具体的事例としては表3-1-1四が挙げられる。

【資料5】(写真3)

①(店印) 神徳 二龍丹 老貝 五拾文

此御薬ハ神伝秘方にして他に類薬なし。凡大人小児もろくの病よりいづる咳をとむる通りの妙薬なり。諸人せき出久しく止らざる時ハ脾胃を損じ、五臓六腑をせきやぶり、身体よハリたる小児ハ虫気おくりて百病の本となるなり。しかるに、此くすりハ咳一通りの妙剤なるゆゑ、かるきハ一貝、おもきハ二貝もちひて、速にせきを止め、痰を治する事、神妙なり。はやり咳、時候あたりのせき、引風のせきから咳、何となく出る咳、持病のせき、其外いろくの病ひより出る咳等をとむる事、神妙不思議なる良薬なり。いかやうにつかれたる病人のせきにても、内症を潤ほしておのづから止るなり。専ら痰を治し、むねをひらき、食をす、め、心よく肥立こと至て早し。まことに諸万人に用ひこ、る見るに、一人も治せざるものなし。其功能ハ御用ひの上、しり給ふべしもつとも、至て年久しく治せざる持病のせきにても、一貝用れバたちまち咳をやハラげ、次第にとをくなり、一廻り用ひて、急度、治するなり。但し、せきよりほかの病にハ一切しるしなし

目印(店印) やねかく有

本家調合所

③

江戸本町壹丁目

太中庵製

本資料の全体構成は、①冒頭文言、②本文、③差出から成る。A・B型に見られた「日付」・「値段表・品物表」・「風景文言」はそれぞれ順に三点(C型全体の九・七%)・二点(同六・五%)・二点(同六・五%)であり、例外的と見做し得るので、全体構成からは外した。

C型を使用する業種として、表3から多い順に掲出すると、薬・化粧品類が二六点、占いが二点、艾(もぐさ)・治療・お守りがそれぞれ一点となっている。これらは何れもその商品を使用することで、何等かの効力を発揮するものとして共通している。薬を服用することで病が癒える、化粧品を使用することで美顔効果が高まる等の類である。その延長として、占い・お守りや治療が位置づけられ、お守り・占いにより未来



写真3 (国立歴史民俗博物館蔵)

表3 C型(効能書型)に分類される『諸屑』の引札

番号	歴博資料番号	店名	戯作者	日付	業種	冒頭文言	書出文言	書止文言	刷・料紙	図柄	値段・品物表の位置	籠景文言
1	H-1492-2-92	神田豊島町二丁目 米屋七兵衛			薬		此御薬ハ	疵によし				
2	H-1492-2-72	あさ草こまかた百助 よこ町にて 三けん 町小児婦人科三代目 たばた龍庵			薬(救命丸・白舌散・真珠丸ほか)		きうめい丸	出し進し申候		丸薬の意匠		
3	H-1492-2-211	(店印)京橋銀座三 丁目 大坂屋八右衛 門			薬	効能						
4	H-1492-3-150	江戸本町三丁目 い わしや五兵衛			薬	靈方紫金錠効 能				奥に店印		
5	H-1492-3-157	元取次所 江戸日本 はし通壱丁目木原店 上下飛脚屋 米屋佐 次兵衛			薬				色刷	商品名を看板の枠で囲う		
6	H-1492-4-472	元祖本店 両国橋通 吉川町 四ツ目屋安 兵衛			薬	阿蘭陀秘方長 命丸 長崎千 鶴堂寿仙製				奥に店印		
7	H-1492-5-149	瀬戸物町西木戸ぎハ かごやノうら 要信 堂 石関庄兵衛			薬	のほせ引下ケ の通歌	かんにんハ	記す		奥に店印		
8	H-1492-6-68	四ツ谷御門外床見世 にて 万屋惣七			薬	づつう 根き り まくら薬	一此まくら薬	知りねかふべし		袖に商品旗 図		
9	H-1492-9-57	山城国淀城下 大 黒屋栄吉妻、旅宿 市ヶ谷田町壱丁目 三河屋安五郎			薬	(仏図)実生 散 此度心願 ニ付病見わけ る事ほどこし	抑私義難病ニ て	候		表題枠囲い		
10	H-1492-10-11	江府下谷山崎町壱丁 目 田口儀三郎	安政二 卯年		薬		此油薬之儀	御断申置候事				
11	H-1492-16-51	江州水口駅東惣門ヨ リニ町西 若松屋弥 助			薬	華佗仙伝 長 寿味噌	夫此味噌ハ	希耳		表題枠囲い		
12	H-1492-22-38	元祖調合 長崎 近 藤氏製 弘所 江戸 京橋銀座二丁目 大 雅堂			薬	両悦床の海	一天地ひらけ	なり		表題に枠		
13	H-1492-25-45	上野山下こま廻し たげざわのよこ丁 児林堂			薬	□□無双 □ 病の名さう	夫世の中に病 ひに	其効能神のご とし		表題に枠		
14	H-1492-25-46	(店印)本家調合所 江戸本町壱丁目 太 中庵製			薬	(店印)神僊 二龍丹	此御薬ハ神伝 秘方	しるしなし		表題に枠		
15	H-1492-17-15	調合所 丹後田辺 宮原氏製 売弘所 江戸日本橋坂本町 川口宇兵衛			薬		抑此御薬ハ	伸ると		仏・薬効図		
16	H-1492-8-108	御薬艾調製所江州伊 吹山禁柏原宿三省堂 謹製 江戸元賣弘所 両國屋庄吉 同賣弘 所日本橋通四丁目玉 子屋裏石井常吉			薬(灸)	御免人參(店 印)神傳靈方 董騰延寿艾 一名あつくなく きくむしき う	一抑此薬	しるへし		表題枠囲い		
17	H-1492-9-65	房州ぬかり山 七代 目しほ女			薬(灸)	房州ぬかり山 靈妙一点名灸 施	此名	雨天日送り		表題枠囲い		

18	H-1492-13-105	猿岩町二丁目 売弘所 ちごや (朱印)		月日	薬 (菌磨き)	麝香散芝翫香御薬はみがき	抑是御薬菌磨之儀は	以上	色刷	座紋の図	本文後	来ル六日売初当日 亀景御差上申候
19	H-1492-5-267	日本橋通二町目呉服町入口 やなき屋五郎三郎			薬・化粧品	御あらひこ おしろい 美粧勝桜香				奥に店印		
20	H-1492-20-33	江戸元祖 御白粉菌磨所大伝馬町二丁目 (店印) 売弘所 富士屋儀兵衛			化粧品	おはくろのはけぬ事三十日請合 松のみとり 本家調合所 三河屋喜兵衛改 富士屋儀兵衛	一松のみどりの儀ハ	候		表題旗の枠		
21	H-1492-22-151	東都住吉町 松本廣屋			化粧品 (白粉)	口上	一むつの国	已上	藍刷			
22	H-1492-2-86	勅許 杉本肥後大掾光房製 本家調合所 大阪心齋橋南老丁目 泉屋勘七郎			化粧品	(商号) 御薬白粉 名水さうし 八水香	抑此八水香之儀ハ	候	藍刷			
23	H-1492-2-228	今川橋東側 花の露玉吉			化粧品		此江戸白粉之儀	候	藍刷			
24	H-1492-25-32	元名前三河屋喜兵衛 江戸大伝馬町式丁目 ふじや儀兵衛			化粧品	匂ひ入御顔白粉五両目入 バッチリ四両目入 御徳用白粉	一右白粉之儀ハ	以上		奥に店看板図		
25	H-1492-9-138	住吉町南側中程 まつ本ひろや			化粧品	(店印) 岩戸香御白粉所			藍刷	表題枠囲い		
26	H-1492-2-199	江戸亀張町老丁目 油店松田陸奥大掾製			化粧品・薬	御寄りおしろい	□草□目に	御けしやうの品なり			本文後	
27	H-1492-23-95	四谷伝馬町一丁目 大横町向目印ニ松平井道達			治療所	日本無類家伝一瘡毒一切請合療治所	一予がりやうちのぎハ	以上				
28	H-1492-4-471	京西洞院五条下ル一丁目 了海 表名かな屋岩治郎			秘法・お守り	右大難病おこらざる	肝要也			奥に店印		
29	H-1492-19-114	横山町老丁目 嶋屋庄兵衛	木黄山人述	卯月十九日 廿二日 店開	艾	(店印) 家伝秘法 もぐさおろし小売 乍禪以口上を御披露申上ル	抑此翁艾之儀	あるしニかはりてあふくものは 木黄山人述		童子図 表題に枠		みせ開当日御景物さ、らより差出し申候
30	H-1492-2-202	本所なり平橋向 山晴堂千俄女			占い	人相	一身之上一代	申候				
31	H-1492-23-81	両国同朋町浅草見附より入口 大琉堂楠齋			占い	「家相方位 人相墨色 周易活断 太琉堂 紀楠齋」 正九つ時迄在宅 ひろめのうち見料心まかせ	抑周易	術をしりたまふべし		表題に旗枠		

が開ける、治療を受けることで患部を治す等の効果が発生する。顧客の立場からすれば、薬にせよ占い・治療にせよ、それらは一見しただけはその効果・効力を知ることが出来ない。C型「効能書型」は文字とおり、引札で扱う商品・サービスの効果を顧客に解説するために作成されたものである。

①冒頭文言については、商品名とその効能を簡潔に記したものが圧倒的に多い。表3では二二点が確認され、全体の七一・〇%を占める。具体的には「靈方紫金錠効能」(表3-四)のように商品名(薬名)の明示、「づつう 根きり まくら薬」(表3-八)のように効能の明示が挙げられる。薬は見た目上の特徴がないものであるから、まずは商品名・効能を前面に押し出し、顧客に認知の徹底を図ることを重視したために、採られた表現と考えられる。その他の表現として、「口上」「効能」「人相」としたものがそれぞれ一点あり、後の二者は引札全体で主張したい内容を一語で要約したものと見えよう。また、「口上」については、薬の効能を口頭で伝えていた名残が残存していると解し得る。

②本文について、書出文言は【資料5】に見られるとおり、「此御薬ハ」や「抑此御薬」のように薬の説明から入る文章が一六点確認され、C型全体の五一・六%を占める。A・B型に見られた時候の挨拶や御機嫌伺い的な不定型的文言は見られず、純粹に薬等の効果・効能について文章が展開する。その意味でC型は実務的性格の強い文章表現といえる。

書止文言も定型は存在せず、区々である。表3-二九はB型に見られた主人代理文言が記され、C型では唯一の事例である。ただ、【資料1・2】で指摘したとおり、当時の戯作者は薬効能書も文筆請負の主要分野として掲げていたことから、『諸屑』以外の資料群には同種の事例が多く見出し得る可能性がある。

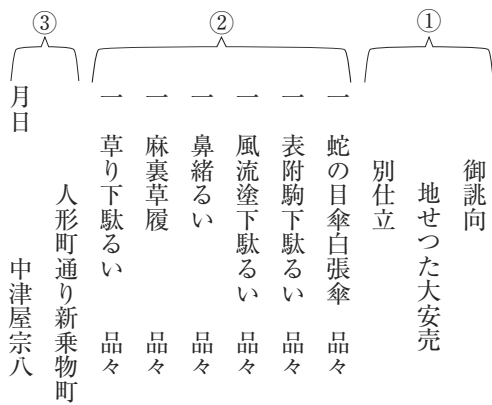
③差出部分について、【資料5】(写真3)のとおり、店の印となるものを目立つように図版によって示すという特徴が見受けられる(他に

表3-六・七等)。また、冒頭の表題部分を看板型の枠線で囲う(表3-五)等のように、図柄として商品名や効能が目立つように工夫されたものも見受けられる。色刷は二点、文字を藍色で刷ったものは四点であり、A・B型に比べればその数は少ない。その反面、墨一色の印刷ではあるが、図柄に工夫を施し、視覚効果を高めたもの、いわば「見られる」要素を高めたものがC型の特徴といえよう。

(4) D型「プライスカード型」の引札

D型「プライスカード型」の引札は表4としてまとめた。総数は一点で、その具体的事例としては表4-八が挙げられる。

【資料6】(写真4)



本資料の全体構成は、①冒頭文言、②値段表・品物表、③差出(引札を発行した店名)から成る。A・B型に見られた「日付」・「本文」・「風景文言」はそれぞれ順に一点(C型全体の二〇・〇%)・〇点(同〇%)・〇点(同〇%)であり、例外的と見做し得るので、全体構成からは外した。本文がないことからA・C型と比較すると「読まれる」要素がなく、

表4 D型（プライスカード型）に分類される『諸屑』の引札

番号	歴博資料番号	店名	日付	業種	冒頭文言	刷・料紙	図柄
1	H-1492-2-83	小田原ういらう		薬	透頂香功能		
2	H-1492-9-88	江戸両国橋通米澤町一丁目中程 大木口哲製		薬	のほせ一さい内を調へ腎水 を益御薬		表題枠囲い
3	H-1492-5-253	本家江戸高田穴八まん阪の上 木又清甫		薬			画面の真ん中に 看板図、品名を 看板で紹介
4	H-1492-5-51	本家 越州福井小田原町 吉田善六		薬	日本無類男女諸病治神薬也 毘沙門天王御夢想御薬 第 一いざりの立大妙也		
5	H-1492-6-107	江戸橋蔵やしき 吹よせ	八月明日より	菓子	御披露	赤色料紙	
6	H-1492-2-179	銀座四丁目横町 高松屋半兵衛		足袋・股 引	御徳用足袋股引類大安売 けんきんかけねなし		奥に看板目印
7	H-1492-4-332	古河江戸町 長嶋屋惣兵衛		足袋・股 引	御詠足袋股引大安売		奥に看板目印
8	H-1492-2-252	(店印) 人形町通り新乗物町 中津屋宗八	月日	履物(雪 駄)・傘	御詠向 別仕立 地せつた 大安売		表題(冒頭文言) 上に店暖簾図
9	H-1492-2-146	(店印) 神田鍛冶町式丁目 常磐津 正本所 文亀堂 伊賀屋勘右衛門		地本草紙・ 錦絵	東都錦絵地本双紙間屋		
10	H-1492-8-21	両国西広小路 林屋正蔵 怪談の 本店		寄席	口工物語大安売 現金ばけ 物ばなし		奥に目印暖簾図



写真4 (国立歴史民俗博物館蔵)

逆に販売品目・値段・効能が簡条書で列挙されているだけなので、一目でその内容が把握し易く、その意味で最も「見られる」要素を前面に押し立てた様式といえる。

①冒頭文言も品名や効能等、引札の情報を簡潔に要約した文言が記され、それが八点、全体の八〇・〇%を占め、C型とほぼ同様の傾向が見受けられる。即自的に情報を伝達し得る要素を重視したD型の特徴が表れている。

D型を使用する業種として、表4から多い順に掲出すると、葉が四点、足袋・股引が二点、履物・菓子・草紙・寄席がそれぞれ一点となつてい⁽²¹⁾る。本文はなく、品名や値段が列挙され、表4-1のように葉の場合はその効能が簡条書で記されることもある。業種からすれば、小売り販売が多い傾向にあるといえる。色刷りはなく、表4-1五の一点のみが赤色の料紙に印刷をしている。

これらの特徴から、D型はA・B型よりも比較的小規模の店舗・業種が用いる形式と考えられる。A・B型に典型的に見られた風景呈上は、原則的には新規開店や新規商品販売という特別な出来事を契機になされる時期限定的なサービスである。そのため、「日付」や「風景文言」が明記されている訳だが、それが終了すると、今後はその版をそのまま使用することは不可能となる。一方、D型の形式は、「日付」も「風景文言」も不要なため、摩耗しない限り、同一の版で使いまわし印刷をすることが可能となる。別言すれば、A・B型の引札を発行する店は新規サービスを提供するたびに引札を発行し得る程の財力を有し、D型の店は割合、財力的にそれがなし得ない傾向にあると推測されるのである。

表4には「戯作者」欄を設けていないが、『諸屑』においてその事例を確認し得なかつた。D型は商品名・値段を列記するのが特徴であり、そこには戯作者が文章上の巧緻を施す余地がないためと考えられる。このことは、D型の引札を発行する店は戯作者に文章を依頼するだけの金

銭的余裕がない場合が、他の型と比較して多いからとも解し得る。

以上から、D型を発行する店舗は他の類型と比較すると、小規模な店業種において用いられ易い傾向にあり、通常営業の内容を広めるために選択され易かつたと見做し得るのである。無論、これはあくまで表4における「傾向」なので、註(21)の事例も含めた検討が今後は必要となる。

視覚効果的要素について、他の類型との比較をとおしながら、D型の特徴を挙げると次のとおりとなる。表1-4における「図柄」欄で何等の工夫が見受けられる点数とそれぞれの型全体における割合は、A型が四六六(六三・〇%)、B型が二二点(五六・七%)、C型が二二点(七一・〇%)、D型が六点(六〇・〇%)となる。同様に「刷・料紙」欄では、A型が二六六(三五・六%)、B型が一七点(四五・九%)、C型が六点(一九・三%)、D型が一点(二〇・〇%)となる。

後者の「刷・料紙」欄での結果から先に述べると、三〇%以上の数値となったA・B型、二〇%未満となったC・D型と大きく二分される。多色の図版を用いれば、それだけ作成費用がかさむことから、A・B型は比較的に財力のある店が用いることが想定され、C・D型はその逆となる。さらにC・D型同士で比較をするなら、D型は墨一色印刷が原則であり、安価に発行できるものといえる。これはD型の特徴として先述した分析結果と合致する。

しかしながら、「図柄」欄においては、C型が七〇%台で一番高い数値を示し、次いでA・D型が六〇%台とほぼ同数値、さらにB型がそれらよりも低い五〇%台という順となった。先の「刷・料紙」とは真逆であり、C・D型の方が数値が高く、A・B型はそれより幾分、低いということになる。C・D型は図柄上の工夫を重視する、画面の「見た目」で商店・商品の興味を惹きつける傾向にあったといえよう。

以上、A～D型それぞれの特徴を概観した。引札の伝達情報は、文字を読み込むことでその意図が受け手に伝わる「読まれる」要素、デザイン・

構成・配置等により一目でその意図が受け手に伝わる「見られる」要素が混在することで成立している。そしてA～Dはそれぞれの特徴に応じて、その混合割合に相違が生じ、大雑把に分類すれば、A・B型は「読まれる」要素が強く、C・D型は「見られる」要素が強いとまとめられよう。

A・B型は手紙文を基本とし、そこに戯作者の手によって文章的に巧緻を凝らされた様式である。それを読解することで情報の伝達を図ることに力点が置かれている。かかる意味から「読まれる」要素が強い、とした。刊行にあたっては比較的財力のある店が発行していたものと推測される。

A・B型と比較すれば、C・D型は商品情報の伝達に力点を置いた実利的性格が強い。A・B型程には文章を読み込まなくとも、文言・画面上の工夫でその内容が伝わるように工夫が施された様式である。かかる意味から「見られる」要素が強い、とした。

なお、本稿では引札をA～Dの何れかの類型に分けて論を展開したが、実際にはC・D型の要素が混在した引札が存在する等、明確に分類し得ないものも存在する。これら何れにも属さないものを含めた検討は今後の課題となる。

(5) 擬制引札

擬制引札とは、引札の様式を援用しながら落書風に文章を認め、語呂合わせ等を駆使しながら世相風刺等をしたものである。⁽²²⁾ いずれも大地震や火災を引札に見立てて記したもので、引札の様式がある程度、一般に定着しているからこそ、成立したといえる。『諸層』において見出された擬制引札については表5として一覧化した。

表5-1～4はA型を、同5～9はC型を元にしながら作成されたものである。内容的にはいずれも火災や地震等の災害を風刺したものが

多い。

当時の人々にとってA型が引札として最も典型的な様式と認識されていたことから、風刺の素材として用いられ易かったと考えられる。

C型については、薬や化粧品などその商品を用いることで、結果としてある効果が現れることを紹介するのに用いられる引札様式である。こうした様式上の特徴から、ある事件等が発生したことで、どのような出来事起きるか、すなわち物事の因果関係そのものを風刺する際に適用的であることからこのC型が用いられ易かったと考えられる。また、C型は薬の広告として用いられることから、薬の服用で本復するように、災害後の世上の安定を祈念する意味を込める際にも適合理的な様式であったと考えられる。

C型の擬制引札の一例として表5-8がある。本文は「抑此妙ゆりだしくづれの義ハ、先ねん信しうにてゆりひろめ候所、大ゆれ大なんじう仕候間、けつしてたこくせりゆりおしゆり一切いさず候所、きん年しよこくにまぎらハしきにせくづれ相ミへ申候(後略)」とあり、薬の効能書をもじった表現となっている。

『諸層』に貼り交ぜられた資料の年代からすれば、「先ねん信しうにてゆりひろめ」は弘化四年(一八四七)の信濃の善光寺地震を指すと見なされる。それが「先ねん」であり、さらに「きん年しよこくにまぎらハしきにせくづれ」とあることから、本資料は安政年間(一八五〇～一八五九)の諸国地震を風刺したものと考えられる。

この本文の後に(本文の左側に)安政地震の「効能」として「目のまはるようふにいそがしい 職人」をはじめ、材木屋・車力・日雇・人入ほか列挙されている。安政地震という災害が発生することで、その結果として震災復興のために職人や材木屋をはじめとした雇用促進・需要増加が見込まれること、もしくはそうあって欲しいことが記されている。事物の因果関係をC型の引札様式を借りて表現したものと見える。

表5 擬制引札に分類される『諸屑』の引札

番号	様式上の分類	歴博資料番号	店名	日付	伝達事項・風刺の内容	冒頭文言	書出文言	書止文言	図柄	値段・品物表の位置	鹿景文言
1	A型	H-1492-12-10	諸方たて大工町ふなやどひま蔵	(安政二年)十月二日	地震世相	口上	町々御火元よく	御用心之程	下側に店舗図	本文後	
2	A型	H-1492-12-41	はりの下谷ア、いたい町にげ出し横丁家くら損店		地震・災害	ゑんきんかくれなし 鯰業参物大部類 乍恐取越以御苦勞申上候	大破之震	非常	奥に暖簾図		
3	A型	H-1492-15-18	諸町通一町目角 風烈堂水ヲ播磨大掾	十月一日	災害	世上	町々御機嫌克	以上	奥に暖簾図		似せびらき当日より鹿粥さし上申候
4	A型	H-1492-14-35	成田屋茂う吉	月参日参	市川團十郎病氣快復の見立て	現在替ル事なし 蟲肩大安心	御客様方益御機嫌克	以上	袖に座紋図		
5	C型	H-1492-15-8	本家調合所江戸呉服橋数寄屋橋御門内町野番司	嘉永五子年正月ヨリ売広メ	火災	御免 妙ふれ出し風薬	抑此妙ふれ出し	神妙なり	表題枠囲い		
6	C型	H-1492-15-12	製法所 自身番丁日比野玄十製		火災	ふれ出し風の薬	抑此御役法	なし	表題枠囲い		
7	C型	H-1492-16-2	眼科 鑄川堂		火災	天地間一寄方いんきんたむし根ぬけの妙薬治験記並に防火策図解上中下三巻	弘化二巳年一市人	しるべし	表題枠囲い		
8	C型	H-1492-11-40	加那免屋石蔵		地震世相	気ばかりながらつよひかうぜう奉申上候	抑此妙薬	以上	袖に店看板図		
9	C型	H-1492-24-88	御はなの下日本ばし他1名		風刺	(店印) おいらんだいきでん大通さん	一第一物前さしこむ	なり		本文後	

③ 江戸の引札との比較からみる大坂の引札の特徴

なお、本研究にあつてD型を元とした擬制引札は見出し得なかつたが、その存在を否定するものではない。ただ、通常では廃棄される引札類を多く収載する『諸屑』にあつて、その実例を見出し得なかつたことから、D型を元とした擬制引札はA・C型のそれよりも数量的に少ないことが想定される。その理由として、D型は品名を列挙する形式であることから、風刺をするにあたり、文章的なおかしみを演出しにくいという欠点があるためと推測される。

擬制引札の作成にあつては、引札の様式に規定され、もしくは風刺内容に適合的な様式を選択していたといえる。

前節では『諸屑』を検討対象として江戸の引札の特徴について論じた。本節では、大阪歴博で収蔵する引札コレクションを素材に同様の分析手法を用いて大坂の引札の特徴を明らかにしたい。

同館にて収蔵する近世・明治期の一枚摺コレクションの中には引札が原形態のまま保管されており、様式論的分析には好個の条件が整えられている。

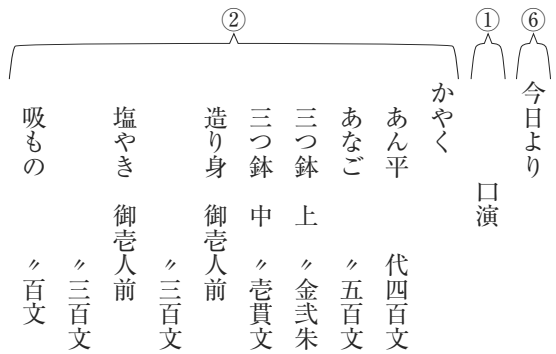
ただ、留意点はいくつかある。第一に、コレクションという性格上、資料個々の伝来について詳細を明らかにすることは困難であること。第二にその大半は時日が記されていないため、年代特定が困難なものが多いことである。

後者について、一般的に大阪において引札が多く用いられるようになるのは近世後期頃からであり(後述)、おおむね『諸屑』の引札群とほぼ同年代である。年代の下限について、つまり近世と近代の区別については、地名表記に注目し、前近代は「大阪」ではなく、「大坂」が主であったことに着目する方法がまずは考えられる。だが、「坂」と「阪」は本来、

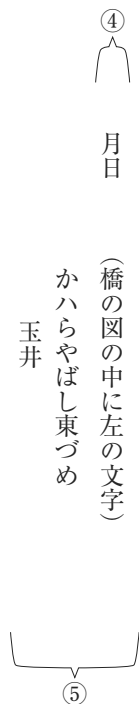
同字であり、近世期にあっても「大阪」と表記した事例が見受けられることから、この方法は採用し得ない⁽²³⁾。

そこで、本稿では引札に表記された値段表の金額表記に注目することとした。明治四年(一八七二)の新貨条例で、近世期の貨幣単位である両・分・朱等から円・銭等へと変更された。この事実により、近世期の貨幣単位が記されたものは、下っても明治初年であり、様式的に幕末期頃のものとは大きな相違はないものと判断される。かかる視点から大阪歴史博のコレクションの中、①近世期の貨幣単位が記されたもの、②値段表はないものの近世期の様式と判断されるものを四四点見出し、表6として一覧化した。なお、分析にあたっては確実に『諸層』とほぼ同時期のもの(もしくはやや時代が下るもの)として比較できるように、①を中心に分析し、②を含めた数値は参考として()内に表記することとした。①は表6-1〜2九が、②は表6-1三〇〜四四がそれぞれ該当する。大坂における引札の具体的事例として表6-1七が挙げられる。

【資料7】(写真5)



右此度直段相改、精々相働キ奉差上候間、不相替御ヒイキ御用向之程、偏ニ奉希上候



①冒頭文言、②値段表・品物表、③本文、④日付、⑤差出(引札を発行した店名)、⑥袖書から成る。袖書には、引札の効力が発する日付(例えば「今日より」等)が記され、表6において「冒頭文言」欄にまとめて記した。また、期間限定サービスが記載されることもある。引札全体の画面構成は⑥を除いて、右側から①〜⑤の数字順に配置されていたことになる。

大坂の引札の画面構成は江戸と比較すると大きく異なる点がある。それは値段表と本文の位置である。江戸のA・B型では「冒頭文言↓本文↓値段表・品物表↓月日・差出」という順に配列されていた。それに対して大坂では「冒頭文言↓値段表・品物表↓本文↓月日・差出」となっており、江戸とは真逆なのである。表6の「値段・品物表の位置」欄では、値段表・品名表があるもの全二五五点(三〇点)の中、本文前が二二点(二五五点)、本文後が四点(四四点)、その他〇点(二二点)となった。大坂では八四・〇%(八三・三%)が本文前に位置しているのに対し、江戸では九六・三%(A・B型の平均値)が本文後に位置しており、その対照性は明白である。

表6で分析した業種の引札は、料理屋が一五五点、菓子が一八五点、醤油・酒が三三三点、旅宿が二二二点、その他が二二二点となっている。A・B型同様に、飲食に関する業種の引札が多く、総計で二二二点(三三三点)、表6全体の七九・三%(七五・〇%)の割合を占めている。江戸のA・B型の平均値も六六・八%であり、今回の分析した引札の業種は江戸・大坂ともその性格はほぼ同じと見做して良い。それでも先述した画面構成上の相違が

表6 大阪歴史博物館蔵の引札

番号	大阪歴博の資料番号	店名	戯作者	日付	業種	冒頭文言	書出文言	書止文言	刷・料紙	図柄	値段・品物表の位置	備考
1	8743	中ばし三つ寺筋北へ入西がハうら 尾張家		六月九日より	料理屋 (はもまむし等)	報条	益御機嫌よく	御立を奉希上候ものハ	赤色料紙色刷	図版	本文前	
2	9232	道頓堀日本橋北詰壱丁西辻角 高砂		月日	料理屋 (かしわ鍋等)	口上	右之通	以上	色刷・藍刷	天に雲図	本文前	
3	8787	戎橋北詰東へ入 甲子亭店 青柳			料理屋 (かしわ鍋ほか)	口条	各々様益々御機嫌克	以上	色刷	柳図	本文後	奥に「店ひらき当日鹿けいさし上候」
4	8881	幸丁住吉橋西 富士見	あるじにかハりて代作舎誌		料理屋 (貸座敷)	五色座鋪御披露報条	土佐日記の	あるじにかハりて代作舎誌	色刷	四隅を四色		
5	8721	戎ばし 大与		午のとしさつき	料理屋 (火災後の開店)	今日より 乍憚口上	端午の御祝儀	以上	色刷	菖蒲図		
6	8756	松しま芝居町 なんち相生丁角 難波屋店			料理屋 (うなぎ あなご等)	口上	花の浪花	以上	藍刷色刷	天に赤・地に青線、全体に枠線	本文表題前	
7	8736	かはらやばし東づめ玉井		月日	料理屋 (あん平 あなご等)	今日より 口演		以上	こげ茶刷	橋図	本文前	
8	8776	道頓堀相合橋南詰八尾孝		今日より	料理屋	口演	私店	已上	色刷	劇場櫓図	本文前	
9	8784	相合ばし三つ寺筋北へ入 手まくら		月日	料理屋	口演	私店	以上	色刷	遊山箱図	本文前	
10	8790	道頓堀相合橋南詰東へ入 江戸伊			料理屋	口演	右此度	以上	色刷	劇場櫓図	本文前	
11	8777	堺すし八幡筋南へ入西かハ 紅梅亭 (朱印)		月日	料理屋	口述	是迄小鉢料理仕候処	以上	色刷	花びら型枠図	本文前	
12	8794	喜楽亭			料理屋	口述	此度右料理	以上	色刷	瓢箪型枠図	本文前	
13	8813	とんだや橋南づめ半丁南 夜あけ		今日より	料理屋	口述	左之品々	奉希上候	色刷	桜花びら他図	本文後	
14	8774	芝居裏にし 松栄庵		月日	料理屋	口上 今日より	右此度	奉願上候	色刷	屋敷外観図	本文前	宛所に「各様」
15	8783	中ばし三つ寺筋北へ入西がハ裏 尾張家		一月廿五日より	料理屋	舌換	あら玉の御寿めてたく	ねかふものハ	色刷	松葉図	本文前	
16	8903	中橋西周防町北二入たまきや惟久			菓子 (氷菓子等)	乍憚口述	一今般	以上	色刷	模様	本文表題前	
17	8702	大阪大手筋折屋町東雲堂 吾妻屋近江大掾 藤原正信 (黒印)			菓子	大手饅頭披露報条	御其昔漢の高祖	謹て言す		袖に亭主挨拶図作者の上に城図	本文後	
18	8764	大ほうじ町心さいばし西へ入 ねざめ			菓子	今日より 口演		以上			本文前	
19	8759	太左衛門ばし半丁北豊嶋屋店			菓子	今日より三日の間壺割さげ口上			色刷	雲図		
20	8737	島之内周防町心斎橋東へ入 いなば店 梅月庵		月日	菓子	今日より三日ノ間二文下ケ	一御得意様益御機嫌よく	以上	藍刷	品名に枠線	本文前	
21	8701	大阪心斎橋周防町北へ入 駿河屋出店			菓子	御菓子司 夜の梅所 寿饅頭演	一先以御得意	以上			本文前	
22	8726	堺新在家町中浜 寺島屋奏久 (朱印)		月日	菓子	御干菓子司口代	右品々	以上	色刷	袖に看板地に菖蒲図	本文前	

23	8703	大阪大手筋折屋町 東雲堂 吾妻屋近江 大掾 藤原正信(朱印)			菓子	浪華名産 大 手饅頭濫觴御 披露	抑家製	奉希候	色刷	城図	本文後	
24	8765	京町橋筋横ほりより 半丁西 俵屋宗七	月日		醤油・味噌	霜月二日より八 日迄七日之間し ほそへ物仕候 醤油大安売					本文前	
25	8808	堺大町中浜東側 和 泉屋治兵衛			酒	口演	右之銘酒	已上			本文前	
26	8760	堺すじ八幡筋南江入 (丸に「政」) 竹屋 政平	月日		酒	口演 伊丹名 田銘酒大安売 駄売 小うり	右之通	以上			本文前	
27	8817	美花園 とかく		(安政5年 カ) 戊午 八月吉日	旅宿	口演	朝夕は	かしく	色刷	花園		
28	8734	大阪道頓堀日本橋北 詰 金屋源蔵 他2名			かわらけ	とたん入 本 徳用かわらけ	右かわらけ	已上			本文後	
29	9060	東国定飛脚問屋 仲 問 (黒印)	辰十月		運送料金	口上	一当五月	已上		全体に枠 線	本文後	
30	8838	周防町 三休ばし西 へ入 とうふや亭 山本大蔵	一月廿日 より		料理屋(蕎 麦 豆腐ほ か)	広告	右品々	也	色刷	梅花図	本文前	
31	8827	生玉島井すじのど町 半丁北へ入東かわ 桃杏庵大市	月日		料理屋(鮮 魚料理)	乍恐御披露申 上候	春景色の	以上	色刷	黄色に白 地で「桃 杏」		
32	8773	天満天神社内 表門 の中西角 清水亭			料理屋(貸 座敷) 開店	換舌	右今般	願ひ奉るこ なん	色刷	梅型の模 様	本文前	
33	8819	南住の江跡 とかく 誌	三月二日 店開キ		料理屋	口演	めてたき	頓首	色刷	飾り枠		
34	8826	難波新地相生丁戎橋 通り西へ入 遊か敷 (朱印)			料理屋	即席御料理御 披露	夏もはや	已上	色刷	袖に魚図		
35	8840	製法所 大坂安堂寺町 山口平兵衛 他4名			菓子	口演						
36	8832	岸和田北町 永月堂 正信 (朱印)	月日		菓子	御菓子司所 寺嶋屋出店 口演	右品々	以上	色刷	袖に看板 地に菊図	本文前	
37	8849	大阪阿波堀太郎助橋 南詰南へ入 松寿園 吉井権七 (朱印)			茶 店開店	今日より三日 之間聊そへ物 仕候 報条	此度店開き	以上	色刷	全体に茶 壺図		
38	8851	順慶町心さいばし西 へ入 大和屋利右衛 門 (朱印)			茶 店開店	今日より三日之 間聊そへ物奉 差上候 口述	益御勇健	以上	色刷	全体に茶 壺図		
39	8852	大阪天満天神橋通裏 門筋北へ入 中島壳 茶軒 (朱印)			茶 店開店	来ル廿一日より 五日之間聊そへ 物仕候 報条	此度店開き	以上	色刷	全体に茶 壺図		
40	8801	大阪戎橋北詰一丁北 へ入 茶源店	月日		茶	口演	一上茶類	以上	色刷	菊花図	本文真 ん中	
41	8932	心齋橋筋(丸に大) 東へ入来たがわ 河 内屋藤兵衛	月日		綿	綿大安売 口 演	右之品々	以上	藍刷		本文前	
42	8896	(店印) 日本地製 堅引請合 鉄針金 仕入処 大坂嶋之内 鍛冶屋町 天王寺屋 治郎兵衛			針金	口演	一近年唐鉄 針金多分渡 来	以上	藍刷			
43	8927	大坂天満市場 青物 乾物問屋 (山印) 亀	月日		荷物運送	口演	一筆啓上奉 申上候	以上	色刷	天に赤線 袖に店主 図	宛所に 「御荷主 様」	
44	8900	はんすてもの 大坂 南久太郎町 三休橋 筋南二入西側 松岡 栄作			印鑑	実印 店印 無料にて洗さ らへ	それ印形の		色刷・ 赤刷	印鑑模様 図		

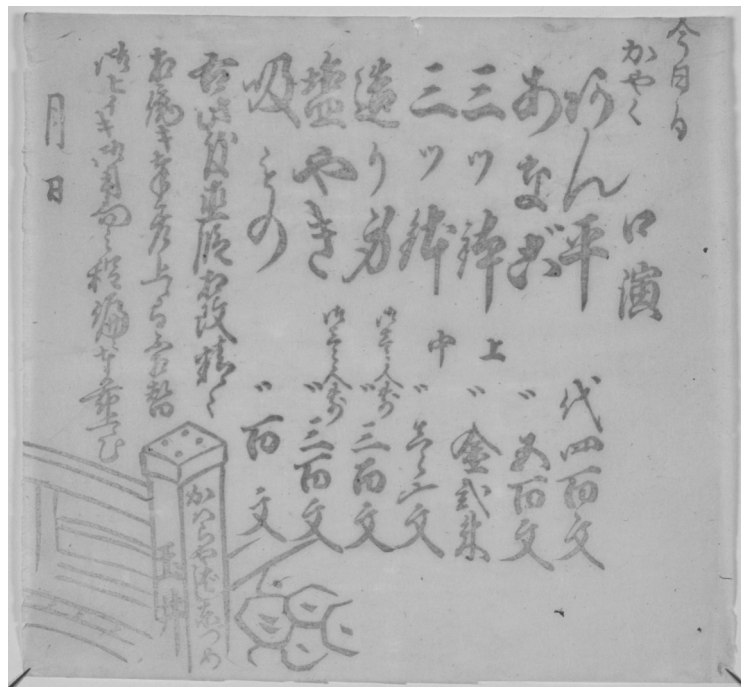


写真5 (写真提供 大阪歴史博物館)

生じるのは、地域的要因と考えられる。以下、江戸と大坂の相違を対比させるために、業種の割合として大坂同様に飲食関係の割合が高いA・B型を江戸に代表させるものである。

右の点を踏まえ、表6に基づき画面構成ごとにそれぞれ分析を加えることとしたい。①冒頭文言では、B型同様に大きく二類型に分けられる。第一は売り出す商品やサービスを明示する形式のもので、例えば「今日より三日ノ間ニ文下ケ」(表6・二〇)・「伊丹名田銘酒大安売」(表6・二六)等が挙げられる。本類型は七点(九点)あり、表6全体の二四・一%(二〇・五%)である。A型ではそれが一五・一%であったことから、冒頭に引札で主張したい情報を簡潔に提示するのはC・D型と同じ特徴であり、実利的要素が強い表現といえる。

第二は口頭伝達内容を文書化したことを表示する文言である。内訳は「口演」が九点(一六点)、「口上(条)」が七点(七点)、「報条」が三点(五点)、「口述」が三点(四点)、その他四点(七点)である。「口演」が一番多いのはA型と同じ特徴であり、また、B型で多く見られた「伏裏」は用いられていない。全体に洒落た表現ではなく、「実用的商用的」表現が多いものといえる。

②値段表・品物表と③本文について、③の本文は②の表の詳細説明的な内容であることが多い。A型に見られた時候の挨拶等の定型的表現はその割合が少ない。本文前に値段表があるものの中、「益御機嫌よく」等の手紙文的表現が用いられているのは四点(四点)で、割合は一九・〇%(一六・〇%)である。大坂の場合は【資料7】の「右此度」等のように②の説明から入るものが多い。数は一〇点(一三点)で、割合は四七・六%(五二・〇%)である。

通常、縦書きの文書は右から左に向けて読む。したがって、江戸の場合は商品の情報ではなく手紙の礼法的文言から入るのに対し、大坂はその逆で、商品の説明を重視した画面構成となっている。この意味におい

て本文の性格はC型にほぼ近い。最も伝達したい情報は最初(右側)に配置し、本文はその補足という位置づけとなっている。この点もC・D型に近く、実務的性格が濃厚な形式といえる。

戯作者が引札の文言上に銘記された事例は江戸とは対照的に表6-14の一例のみである。作者は不明ながら戯作風の文章もあることから(例えば表6-15等)、実際には戯作者が手掛けたB型的なものもあると推測される。いずれにせよ彼等の名を文言として明示しないのが大坂の特徴といえる。

④日付について、「月日」・「今日」等を除き、具体的に明記されているのは五点(七点)であり、全体の一七・二%(一五・七%)である。江戸のA・B型の平均五七・八%と比較すると、この点でも大坂は対照的で、C・D型に近い性格を有しているといえる。

関連して、風景文言がわずか一点しかなく、この点も江戸と大坂は対照的である。江戸のA・B型の場合は、【資料1・2】にあるとおり、「諸商売開店御披露 新規 新工夫・再興」が(特にA・B型の)引札発行の契機となっており、来店した顧客に対しての特別サービスは風景呈上であった。いわば粗品文化が発達していたのである。それに対し大坂では、「今日より三日の間割さげ 口上」(表6-19)・「今日より三日ノ間二文下ケ」(表6-20)のように値下げを契機に引札を発行しているケースが散見されるのである。或いは「霜月二日より八日迄七日之間しほそへ物仕候 醤油大安売」(但し入もの御持参可被下候」(表6-24)とあるとおり、別の商品を「おまけ」として無料配布する営業方法を採用しており、これも広い意味で値下げの一環と捉えられるであろう。大坂の場合はいわば値下げ文化が発達していたのである。

それぞれのサービス開始の時期について、江戸の場合、A・B型で指摘したとおり、明日文言が主流であり、本日は一例も存在しなかった。一方、大坂の場合、明日文言は見られず、「今日」とする今日文言が六点(八

点)存在する(ただし表6-14二の一点は例外的に「来ル廿一日より五日」と未来に関する文言がある)。引札を顧客に渡したその日がサービス開始の時期となるのが大坂であり、対照的に江戸ではその時期を事前告知する文化と捉えられるのである。

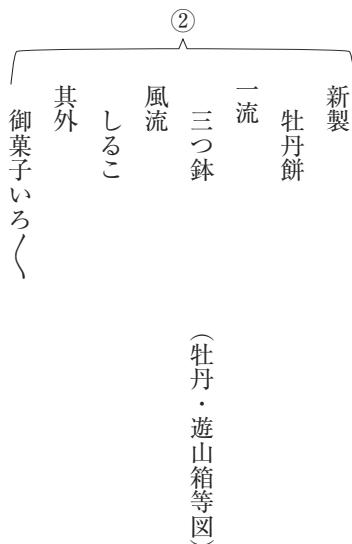
視覚効果の側面でも両者は対照的である。大坂では色刷を多用しており、表6では二一点(三五点)、全体の七二・四%(七九・五%)であるのに対し、江戸のA・B型の平均は三八・一%で、二倍弱の開きがある。図柄も各店で工夫が施され、二三点(三五点)、全体の七九・三%(七九・五%)で、江戸より多い(最高はC型七二・〇%)。

以上をまとめると、大坂の引札は江戸と比較して、商店・商品情報の伝達を優先させた画面構成・情報内容であり、視覚効果の側面も重視していたのが特徴といえる。本論点をより補強するために、別の資料からも検証することとしたい。

まず、『諸層』は江戸の印刷物類が主として貼り交ぜられているが、若干ではあるものの京都・大坂のそれが含まれている。次に挙げるものは『諸層』に貼られた大坂の引札である。⁽²⁴⁾

【資料8】(写真6)

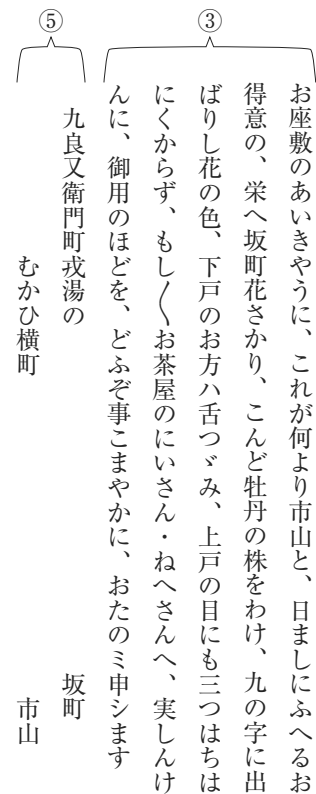
芳龍(朱印)



大津画ぶし 玉屋玉助作



写真6 (国立歴史民俗博物館蔵)



② 値段表・品物表、③ 本文、⑤ 差出（引札を発行した店名）から成る。
 ① 冒頭文言と⑥ 袖書はないものの、その他の要素は【資料7】と同様に含まれている。引札全体の画面構成についても同様で、右側から若い数字順に配置されている。特に「値段表・品物表↓本文↓差出」という順序は先に大阪歴史博物館の特徴として指摘したものと同じである。図柄も色刷で写実的な花や遊山箱等が描かれ、視覚的にも目を惹く。大阪歴史博物館を基に論じた先の結論と何れも合致するといえる。

さらに、他の資料群との比較も試みることにしたい。大阪城天守閣蔵「南木コレクション」には数多くの引札コレクションがある。これは南木芳太郎氏が昭和初期から収集した上方関係資料コレクションの一部で、引札については大阪引札研究会編『江戸・明治のチラシ広告 大阪の引札・絵びら』（東方出版株式会社、一九九二年）として写真入り解説図版が公刊されている。²⁵ 当該書には引札一点ごとにつき、近世期のもとの明治以降のものとの区分けして紹介をしている。これを利用して、商店・商品広告としての引札の中、近世期の引札に該当するものを表7としてまとめた。全体の総数は四五点である。以下、同表について分析を加える。

まず、表7-121〜125の五点は、大坂の商店が江戸もしくは他国出

表7 南木コレクションの引札

番号	書籍番号	店名	戯作者	日付	業種	冒頭文言	書出文言	書止文言	刷・料紙	図柄	値段・品物表の位置	備考
1	3	大坂道とん堀日本橋南詰 ひやうたん河内屋庄右衛門			旅宿		一此度六条御殿御用達御定宿	御世話仕候	色刷	屋号・河内屋の図版		
2	6	今ばし西詰角天満屋六兵衛			飛脚	三十石登船便覧	淀川の	以上		淀川図版		
3	7	大坂本町ばし西詰南 山本屋勘太郎		月日	船	御座船賃定書	右之外	以上	色刷	船の図	本文前	
4	9	戎ばし 大与		申八月	料理屋	口述	一秋暑之御	以上	色刷	亭主の図		
5	11	浪花石町 三橋楼			料理屋		こたひ諸君子の	奉る者ハ	藍色の料紙	料亭の図		
6	12	なんば 仙一方	浦川公左画		料理屋		きのふ	謹でますこと爾る	色刷	料亭の図		
7	13	生玉鳥居すぢ東へ出はなれの南角一東庵(朱印)			料理屋	報条	桃花ものいはずといへども	希上奉てしかり	色刷	料亭の図		
8	17	浪花荒陵山下浮瀬四郎右衛門		安政二酉七月再々板	料理屋	家蔵奇品目			-	盃の図		
9	23	なんば 一方楼			料理屋	乍憚御披露	恵方ハ歳徳の	申述ること爾り	-	しめ飾り図		
10	24	長堀ばし北詰南梅月堂 浪華家		月日	料理屋(うなぎ)	今日より口上	当春	以上	-	梅図	本文前	
11	25	四つはし東南詰角魚治		月日	料理屋(うなぎ)	今日より口演	一新春之	以上	-	料亭の図	本文前	
12	26	久宝 喜多福		丑仲春	料理屋	乍憚口上	御旦那様益々	已上	-	桜と店の提灯図		
13	28	芝居西となり 茶ミせ			料理屋	口上	一私ハ御霊芝居西どりの	奉差上候	-	芝居小屋図		
14	53	江戸出店本町四丁目 日野屋惣助			薬屋		此度下店ニ	知り給ふべし	色刷	江戸出店図		
15	54	大坂心齋橋通八幡筋北へ入 本屋為助		月日	本屋	乍憚口上	一諸方御得意様方御機嫌	以上	-	店の図		
16	63	大阪心齋橋通博労町北へ入西側 鹿の屋真萩			名物屋	南都名産元興寺味噌	夫納豆味噌の	うやまつて言す			出版店の後	
17	64	大阪心齋橋通博労町北へ入西側 鹿の屋真萩			名物屋	南都名産さおしか田麩	鹿を追ふハ	きこしめせともふす			出版店の後	
18	65	大阪心齋橋通博労町北へ入西がハ鹿の屋真萩製			名物屋	新製紅塩味噌御披露報条	実に紅ひ	敬てもうす			出版店の後	
19	66	なんば 豆茶屋	長水(画)	今日より	茶屋	乍憚口上	世の諺	のぶること爾り	色刷	御膳図		
20	67	大阪東はり上大和橋西詰北入 千歳軒 丹波屋八郎右衛門(朱印)	晚鐘成誌		茶屋	諸国茗茶御披露	酒なくて	希ひ上たてまつり候	色刷	茶器図	本文後	宛所に「各様」
21	86	大坂心齋橋筋順慶町角 船橋屋織江 出見勢	式亭三馬戯述	開店六月明日より	料理屋	江戸御菓子調進所	東の花の	述るになん	色刷	船橋図		奥に「当日けいぶつ 小三馬豊国画 おもしろき新作の団扇奉差上候」とある。
22	87	栃木中町栃木矢兵衛	式亭三馬戯作		小間物問屋	伏裏	貸物さへ	のぶるになん	色刷	店図		
23	90	筋違御門外新地 雷神門出見世 船橋屋織江	鈍亭魯文述	巳九月明日より	菓子屋	伏裏	故きを	甘口になん	色刷	橋と船図	本文後	奥に「当日鹿景奉差上候」とある
24	91	道頓堀 四季場	あるじにかはりて 江戸の旅客 花笠魯助劇作	戌四月十日	料理屋		情ある	事になむ	-	料理屋内の図		

25	92	大阪心齋橋清水町 西南角 江戸店花 月堂 金屋喜五郎	平亭銀鷄誌		名物屋		遠からんもの ハ	花月堂の主人 に替りて					
26	95	大坂心齋橋南本町 西へ入 古本売買 柏原屋義兵衛			本屋		右之通	以上	-	差出が看板 の図	本文前		
27	97	大坂あわぎ戸屋町 三丁目 御免売弘 所 井上利兵衛		享和元西 二月日	竜吐水	御免龍起水 絵図	一今般蒙御免 売弘候	已上	-	竜吐水の図			
28	98	摂州大坂天満北富 田町伏見屋 御免天 龍水 吉田伊兵衛			農業用具				-	農業用具図			
29	99	塩町通り井池南へ 入東側 土市			土	来ル一月三日 より 口演	右此度土商法	以上	-		本文前		
30	101	大人小児諸病撫			病氣治療		抑なで之	たもつべし	-	治療の様子 図	本文後		
31	103	大阪島之内八幡宮 少シ西 根元売弘 所 米屋宇兵衛			酒	丹州八木 本家 桑酒	此靈酒	本能書ニしる す	-	甕図			
32	107	戎橋口相生町角 江戸店			名物屋		東路を	已上	色刷	江戸の図			
33	125	堺ばし塩町角 か ざりや嘉助		安政五戊 午歳	金物・薬		金物	以上	色刷	商品図			
34	126	山崎屋嘉兵衛 (ほ か2店共同)			金物・ 仏壇	かなけとめ				橋図			
35	139	大阪松屋町すじ本 町南へ入 福島屋 久次 (朱印)			菓子屋	菓子名よせ 御披露	君が代を	伏て希	色刷	笹の葉・花 の図			
36	142	北久太郎町一丁目 筋南へ入 橋屋出 店		(安政二 年) 月日	米屋	白米大安売	此度新店ひら き	以上	-		本文前		袖に「九月 廿三日店ひ らき」とあ る
37	144	大阪大手筋折屋町 東雲堂 吾妻屋近 江大掾 藤原正信 (黒印)			菓子	大手饅頭 御披露報条	其昔漢の高祖	謹て言す		袖に亭主挨拶 図 作者 の上に城図	本文後		
38	146	大阪心齋橋通博 町南へ入東がハ 津国屋清平衛			味噌		鴨の	述るになん	-	鴨・鯛ほか 図	本文前		
39	156	なんば新地戎橋通 中すじ南西がハ 備中屋又助		月日	木綿類	正札附 現ぎ ん 懸直なし 木綿類	益御壮健ニ	以上	-	店名の上 部に店印の 図	本文前		袖に「十三 日より三日 之間御そへ もの仕候」
40	157	大阪御池橋東詰半 丁東北側 丸亀屋 儀兵衛		月日	太物	口演	益御機嫌克	以上	-	亀図	本文前		
41	164	本家ぜさい 天下 茶屋津田助三郎 (印)			薬	是齋来由	夫天下	べし	-	店の図			
42	165	大坂うなぎ谷三休 橋筋西へ入町 御 免調合所 法橋吉 野五運 (印)			薬	人參三蔵円	此人參	也	-				
43	166	長与貫一 長与専 齋 鑑製 (印)			薬	大村 真珠 丸	人皇	しかり	-				
44	168	売弘所 大阪順慶 町井戸ノ辻東入 奈良屋善兵衛			薬	御免蘭方 きなきなゑ ん	抑此	うたがひなし	-	阿蘭陀人図			
45	170	大阪本店 堺筋通 長堀橋一丁南 大 橋善兵衛 (朱印)			薬	ホルトス	夫たん	さしあいなし	色刷	袖に薬看板 図			

※1 「書籍番号」は註(2)大阪引札研究会書における資料番号である。

※2 刷・料紙らんにおいてモノクロ頁で紹介された引札写真については判断をし得なかったので「-」とした。

身の戯作者に作成を依頼した引札で、これは江戸のB型に近い特徴を持つている。配布されるのは大坂であつても、あくまで制作者の意向により書式が決定されていたことが読み解ける。

その様式論的特徴は、いずれも戯作者名が明記されていること。いずれも日付が記されていること。関連して「今日」文言はなく、「明日」文言があること。冒頭文言に「伏稟」を用いたものが二点含まれること。値段・品名表が本文の中にあること。風景文言が二点あることである。前節で述べたとおり、これらはいずれも江戸のA・B型の特徴である。したがって、以下、表7を用いる際は、この五分を除いて大坂の特徴を分析する。

表7における引札発行店は料理屋・茶屋等の飲食店が一七点、薬店が七点で、全体の半数を占め、特に飲食店の多さは表6と同じ条件にある。以下、次の諸点も先に大坂の特徴として挙げたものに当てはまる。時日については、それが明記されているのは五点でしかなく、不記載の傾向にある。関連して「明日」文言はなく、逆に「今日」文言は三点に確認される。冒頭文言について、表題が引札全体の内容を要約したものが一九例あり、商店・商品情報の伝達を重要視している点も一致する。画面構成について、値段・品名表は本文前が九点、本文後が三点であり、これも大阪の特徴である。出版店名の後に値段表類を掲載する事例が三点ある。本文から独立しているため、目を惹きやすい画面配置であり、これも情報伝達にあたり、実利性を重視したものといえる。

視覚的要素についても、色刷りは不明なもの二点を除く全一九点中、一三点が確認され、図柄の工夫も三三点が見受けられる。この点については、掲載書籍の性格上、優品類を特に選択している可能性があるため、割り引いて捉える必要はあるものの、それでも視覚上の工夫をする傾向性は読み解ける。

以上により、『諸層』の大坂の引札からも、「南木コレクション」の引

札の分析結果からも大阪歴博コレクションの特徴と一致することが確認された。商店・商品情報の伝達を優先させた画面構成・情報内容であり、視覚効果的側面も重視していたのが近世期における大坂の引札の様式論的特徴と結論づけられる。大阪歴博の分析結果から得られた特徴を有する引札について本稿では「大坂型」の引札と呼称したい。

おわりに―広告史上における引札の歴史的位置―

本稿で述べたことをまとめると次のとおりである。幕末期における江戸の引札の特徴は、商店・商品情報を直截的に伝えるのではなく、文章上の巧緻を楽しませる、いわば「読ませる」ことに主眼を置いたものといえる。このことは手紙を基本とした書式に表されており、実用文よりも商用文を重視した文言となつている点に明らかである。

このことから戯作者が引札を作成する文化が、それと同時に並行的に、景物文化が発達する。表7―二一の式亭三馬が制作した引札には「当日けいぶつ 小三馬豊国画 おもしろき新作の团扇奉差上候」とあり、彼自身が景物制作に関わっていることが示唆されている。引札だけでなく景品もその戯作者の名を広める機会となつていた。²⁶

一方、大坂はあくまで商店・商品の情報を伝えることを重視する、いわば実利的性格が濃厚である。一目で興味を持てるよう、その引札の内容が理解できるように視覚的側面にも力点を置き、いわば「見せる」型ともいえる。これらのことは、例えば、一読して内容が把握できる表題を用いる傾向にあったこと、画面配置として商品情報が目につきやすい位置に置かれたこと、商用文より実用文を主とした本文であったこと等から指摘できる。

本稿では十分に論じられなかったが、江戸は「明日」、大坂は「今日」文言が目立つということは、両者の配布形態の相違が想定される。江戸

では開店などのあるイベントが開始される前に配布されるのに対し、大坂はそれが始まる当日に配布される可能性がある。

右に付随するサービスとして、江戸では景品であったのに対し、大坂では値引きを主としていた。このことは両都市における商慣行の相違が想定され、今後、他資料を用いながら検討をする必要がある。

最後に、本稿で行った様式論的検討が今後の広告史研究の進展にどのような意義を有するか、という点について述べたい。従来の引札研究にあつて、近世期の大坂の地位は相対的に低く評価されてきた。²⁷⁾ 例えば、明治一六年(一八八三)に『稗官必携 戯文規範』(大村安兵衛発行)という戯作文の文例集が刊行された。そこには七六編の引札文例(本稿のB型に相当)が掲出されているが、それは何れも江戸の戯作者によるもので、大坂のその作例は存在していない。この事実に基づいて北川央氏は「江戸時代の引札文化が、東高西低であつた何よりの証である」と評価する。²⁸⁾ 確かに江戸ではB型が発達し、大坂ではそれが根付かなかつたという点では正鵠を射た指摘である。

だが、様式論的視点に立ち、広告史の長い射程の中で捉えれば次のような解釈も可能である。明治一六年(一八八三)に福沢諭吉は将来の広告の在り方を巡り、「時事新報」社説「商人に告るの文」(『福沢諭吉全集』九)において次のように著している。「広告引札の文は必ず有名なる筆者に依頼せざれば叶はぬ事と信ずる者多し。大なる間違なり」とし、これは明治一〇年代にあつても、文筆家に引札作成を行うことが主であつたことを示す。別言すれば本稿のB型的な広告が重要視されていたことになる。

こうした動向に対し、「広告文は達意を主とす。余計なる長口上は甚だ無用なり。他人に案文を依頼せぬ自筆の広告文の中には、時に由り文法にも適はぬ悪文もあるべしといへども、其意味の分らぬ様の事は、決してなきものなり」とあり、広告に対しては従来の基準であつた文章的

な巧緻さよりも、「達意」に価値を見出しているのである。自店の情報を消費者に分かり易く伝達すること、商店・商品の情報を直截的に伝えることの方の重要性を説いているのである。実利性の高い本稿の「大坂型」のような広告こそ、今後の広報であると唱えていたといえよう。

これは広告費を得るために、新聞広告の有用性を説いた文章であるから、その分は割り引く必要はある。ただ、広告史という長い時間軸で捉えれば、福沢諭吉が主張した方向性のとおりとなつていく。文書の巧拙に価値を置く江戸のB型的な発想ではなくなり、「大坂型」のように実利性の高い、視覚情報に力点を置いたもの、すなわち「達意」の価値観が主流となつた。²⁹⁾ 近世期における大坂の引札文化は江戸に劣つていた訳ではない。「達意」という基準に照らし合わせれば、むしろ近現代の視覚効果重視の広告文化を歴史的に準備した先進的な広告文化が大坂では育まれていたことになる。かかる視点から江戸と大坂の引札文化を比較すると、従来とは真逆に「西高東低」であつたのが実情であつたと見なし得るのである。³⁰⁾

なお、今後の課題として次の諸点を付言しておきたい。

第一に江戸・大坂以外の他都市の比較である。本稿の結果を基軸にすることで、文化伝播の在り様など様々な論点の解明が期待できる。

第二に、口頭とその文字化の関係である。引札の冒頭には「口上」「口演」など、口頭文化との関連を示唆する文言が多様されている。口頭広報と文書広報の関係を追求する必要がある。引札の配布形態とも関わりと想定されるが、それも含めた視点が求められる。

第三に、引札と他資料との関係である。看板や暖簾の図版が引札に多く記されており、これも両者の関係性の深さを窺わせる。

様式論的視点から引札を捉えることで、新しい広告を含めたメディア史を構築する可能性が開かれるといえよう。

註

(1) 『諸層』に関する基礎的な情報は歴博の「データベースれききはく」(<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>)における当該資料の概要説明参照。三代目入船扇蔵については中川桂「嘶家番付類に見る近世の桂文治代々」(『比較日本学教育研究センター研究年報』一三、二〇一七年)参照。以下、本稿において「扇蔵」とは三代目のことである。

(2) 広告史について参照したものを発表年代順に並べると次のとおりである。増田太次郎『引札絵ビラ風俗史』(青蛙房、一九八一年) a、同編『図説 近世日本広告史—引ふだ・絵びら・錦絵—』(日本図書センター、二〇一四年復刻、原本は一九八一年) b、早稲田大学図書館編『幕末・明治のメディア展—新聞・錦絵・引札—』(早稲田大学出版部、一九八二年)、今野信雄『広告世相史』(中公新書、一九八五年)、津金澤聰廣『広告人への胎動』(山本・津金澤『日本の広告—人・時代・表現—』世界思想社、一九九二年)、大阪引札研究会編『江戸・明治のチラシ広告 大阪の引札・絵びら』(東方出版株式会社、一九九二年)、内田九州男『大坂のちらし・引札』(前同書)、中田節子『広告で見る江戸時代』(角川書店、一九九九年)、杉本徹雄『引札』に関する文献的研究』(『日経広告研究所報』二二〇、二〇〇三年)、中田節子『近世の広告宣伝に見るマス・コミュニケーションの兆し』(月刊 言語 三三一九、二〇〇三年)、八巻俊雄『広告』(法政大学出版局、二〇〇六年)、北田暁大『広告の誕生—近代メディア文化の歴史社会学』(岩波現代文庫、二〇〇八年)等を参照。従来の広告史にあつては、増田太次郎氏の一連の研究に依拠しており、本稿にあつても同氏の文献 a・b に負うところが多い。また、樋口知志・佐藤友理『引札に見る近世・近代の社会と文化』(『アールテス リベラレス』(岩手大学人文社会科学部紀要) 八六、二〇一〇年)に紹介された引札関係文献・資料については、本稿執筆にあたり有益な情報源であつた。

(3) 例えば註(2) 増田前掲 aをはじめとした広告史の概説書にあつては越後屋が天和三年(一六八三)に発行したものを最古の引札と位置づけている。だが註(2) 内田前掲は当該説に疑問を呈している。下向井紀彦「一八世紀における三井越後屋の宣伝広告—引札に関する基礎的研究—」(『三井文庫論叢』五一、二〇一七年)においても、現段階にあつては天和三年配布説は検証し得ないとし、同店では遅くとも享保年間(一七一六—一七三六)に引札を配布したことが確認できるとしている。これらに基づき、本文では引札の発生は一八世紀初頭頃と記した。

(4) 註(2) 津金澤前掲五頁。

(5) 近世もしくは近代期の引札を紹介し、その歴史的背景を論じたものとして、例

えば次のものが挙げられる。鈴木俊幸『草紙類の流通と広告—甲府—二文字屋藤右衛門引札—』(『書物学』二、二〇一四年)、同『京都の絵草紙屋紙藤(綾喜)—引札と紙看板—』(前同)五、二〇一五年)、同『書籍流通拠点の生成と水運—下総正文堂利兵衛の引札—』(前同)六、二〇一五年)、同『須原屋茂兵衛の薬商売—引札と広告葉書—』(前同)一一、二〇一七年)、以上は後に同『書籍文化史料論』(勉誠出版、二〇一九年)に所収。他に福岡勝『金港堂創業期の引札』(『書籍文化史』一七、二〇一六年)等がある。

(6) 越後屋については註(3) 下向井前掲、加賀屋については菱刈功『寒暖計事始 日本における温度計の歴史』(中央公論時事出版、二〇一七年)一四章参照。その他、資料紹介的なものとして緒方洪庵記念財団編・発行『除痘館記念資料 室解説—〇周年記念 大坂除痘館の引札と摺りもの』(二〇一八年)等がある。

(7) 大坂では、註(2) 大坂引札研究会前掲、藤本毅『明治のチラシ広告 大坂・枚方の引札—池田屋コレクション』(東方出版、一九九〇年。地方では、森嘉紀『北陸の引札考』(『金沢美術工芸大学報』二四、一九八〇年)、同編『金沢の引札』(文一総合出版、一九七九年)、須藤茂樹『四国大学図書館所蔵「凌霄文庫」の阿波の引札』(『凌霄』九、二〇〇二年)、藤井獎『讃岐の引札—』広告に見る明治・大正浪漫—』(四国新聞社、一九九六年)、福西大輔『熊本の引札に関する一考察—熊本博物館所蔵資料を中心に—』(『熊本博物館報』一八、二〇〇六年)がある。

(8) 片山正彦『枚方と門真にのこる引札—絵びらを中心に—』(『御影史学論集』四三、二〇一八年)。

(9) 以上、正月用引札については以下の諸論を参照。正月用引札の歴史については加藤貴裕『引札の研究—正月用引札の実際と系譜について—』(『日本文化論年報』二、一九九九年)、中谷哲二『幕末明治の引札と画入り暦』(『日本印刷学会誌』四五—四、二〇〇八年)がある。正月用引札の画像分析は熊倉一紗『明治・大正の広告メディア』(『正月用引札』が語るもの) (吉川弘文館、二〇一五年)をはじめとした同氏の一連の研究、及川智早『神功皇后伝承の近代における受容と変容の諸相—絵葉書・引札というメディアを中心に—』(『国文学研究』一四八、二〇〇六年)、小田島建己『新春のノベルティにおける福祥のイメージ—岩沼で配布された正月用引札—』(『東北文化研究室紀要』五六、二〇一四年)がある。関連して引札の絵師については中谷哲二『尾竹国一の大坂時代の引札と口絵—修明と観明の手がかり—』(『大阪商業大学商業史博物館紀要』一〇、二〇〇九年)がある。

(10) 註(2) 増田前掲 a三四—三七頁。

(11) 以下、河竹黙阿弥については河竹繁俊『河竹黙阿弥』(演芸珍書刊行会、一九一四年)参照。引用箇所は順に同書三三八頁・同頁。なお、当該書籍を含め、各種資料を本論に引用するにあたっては原則的に新字体で統一し、あわせて説

み仮名部分は省略していることをお断りする。

- (12) 以下、花笠文京については木越俊介「代作屋大作」花笠文京の執筆活動について(『近世文芸』六九、一九九九年)、同「天保年間の花笠文京―補正」山口県立大学国際文化学部紀要(一一(二〇〇五年)参照)。
- (13) 註(11) 前掲三七九頁。
- (14) 谷峯蔵『江戸のコピーライター』(岩崎美術社、一九八六年)四章参照。
- (15) 註(14) 谷前掲一八八―九頁では、見出しに「実用文型」と表記しつつも、本文では「実用商用文型」とも説明している。本稿次節A型の引札について説明するとおり、幕末期の引札は商用文が主流となるので、本稿では「実用商用文型」という語を用いる。
- (16) 『諸層』H―四九二二二―一三(H以下の数字は歴博が付与した資料番号。以下同)。
- (17) 『焦後鶏肋』(国立国会図書館蔵マイクロフィルム YD1―古五五六九)に貼られた引札。当該資料は、花笠文京の兄であり儒学者の東条琴台によって収集・編集された各種印刷物類の貼交帳である。
- (18) 註(11) 前掲三七六頁。
- (19) 註(2) 増田前掲b二〇・七〇―八二頁参照。
- (20) 山本野里子「梅素玄魚考―その生涯と芸術性―」(『人文研究』六三―四、二〇一四年)参照。
- (21) 『諸層』の中では見出し得なかつたが、紙屋の引札も多くはD型である。関義成編・発行『江戸明治紙屋とその広告図集』(一九六八年)一〇〇―一〇九頁まで掲載されている紙屋の引札写真一九点の中、D型は一八点を占める。
- (22) 註(2) 増田前掲b五―五四頁参照。
- (23) 「大坂と大阪」(『大阪の歴史』六、一九八二年)、『大阪府史』七(五八五頁)参照。本稿にあっても例えば、後掲表7―一六―一八は天保期に特定される引札であり、いずれも「大阪」と表記している。当該資料については註(2) 大阪引札研究会前掲参照。
- (24) 『諸層』H―四九二二二―一八。
- (25) 註(2) 大阪引札研究会前掲書二―三頁に渡辺武氏により、南木コレクションの性格について解説が記されている。以下、南木コレクションの引札に関する事項、例えば商店・戯作者に関する基礎的事実は全て当該書に拠っている。
- (26) 以上の論点は浅塾晴子「戯作者と広告―式亭三馬店を例にして―」(『中央大学 国文』四七、二〇〇四年)参照。
- (27) 註(2) 増田前掲a三―一頁ほかでは、大坂は口上広告が盛んであったから、引札は盛行しなかつたとする。註(2) 樋口・佐藤ほかが挙げる安政三年(一八五六)起筆の「浪花の風」(『近古文芸温故知叢書』七)にも「当地(大坂)にて店開き、
- 又は売初などいふ事に、江戸の如く、品書披露の口上を板行にして配ることは稀なり」とあり、大坂には引札文化が低調であったことになる。だが、一方で本稿表6・7のとおり、同地には引札が存在したことも事実であり、両者をどのように捉えるかはいまだ課題である。当面の仮説として、大坂で引札が盛行するようになったのは「浪花の風」が執筆されて以降、具体的には万延年間(一八六〇―一)以降と捉えれば、整合的に解釈はし得る。
- (28) 北川央「引札の歴史概観」(『まいど!ご虫貞に―引札に見る忠臣蔵の世界―』赤穂市立歴史博物館、二〇〇八年)四四頁。加藤秀俊・前田愛「明治メディア考」(エッセイ・スタンダード石油株式会社広報誌、一九七九年)三〇頁において、近世期の広告(引札)は手紙をパブリックにしたメディアであることを指摘するが、これも本稿でいうA・B型を基準とした捉え方である。
- (29) 広告史は註(2) 緒論参照。なお、註(2) 今野前掲一三六―七頁においても、明治九年(一八七六)岸田吟香が手掛けた銀座の檸檬水の広告は「ズバリ商品の特性説明」で「新日本」の象徴であったのに対し、同時期の浅草の茶店・料理屋の引札は「旧日本」の象徴と評価する。本文で述べた近世期のB型的価値観から「達意」の価値観への変化は、明治一〇年代前後頃に起きたことが想定され得る。
- (30) 註(9) 加藤前掲ほかで指摘されるとおり、明治二〇年代以降に盛んとなった正月用引札は大阪を中心に制作された。正月用引札は図像中心の引札であり、そうした文化が生み出された背景として、今後、「大坂型」引札との関連性を究明することが求められる。

(東京女子大学現代教養学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇一九年八月五日受付、二〇二〇年四月九日審査終了)

Paleographical Study on *Hikihuda* (引札) which was Distributed Handbills in the Edo Period : Comparative Study of the Collection of the National Museum of Japanese History and Folklore and the Osaka Museum of History

TAKAHASHI Osamu

“*Futokoroni-Tamaru-Morokuzu* (懷溜諸屑)” is the scrapbooks which were made in the 19th century, which they store in the National Museum of History and Folklore. Many handbills are put on the scrapbooks, and the amount accounts for 20% of the whole. The handbills which was called *hikihuda* (引札) in the Edo era. The study of the *hikihuda* is important in clarifying urbiculture.

Then this paper aims to study the following three points: first of all, I will consider about the characteristic of the *hikifuda* which put on “*Futokoroni-Tamaru-Morokuzu*” by the paleographical study, secondly, I will consider about the characteristic of the *hikifuda* which they store in the Osaka Museum of History by using similar analysis technique, thirdly, I try a culture comparison of Osaka with Edo.

As a result of study, the next point became clear. Edo and Osaka were contrastive. The *hikifuda* of Edo had character such as letters, and as for them, invention was done in a sentence. On the other hand the *hikihuda* of Osaka established weight in conveying product information. And invention was taken in a layout and a design. They were practical.

In the history of advertisement study, Osaka has been evaluated low. However, this study is different from it. Osaka was ahead of a characteristic of the modern advertising media called the visual effect serious consideration historically and prepared.

Key words : *Hikihuda*, Comparison between Edo and Osaka, Advertising Culture, Stylistic Features, *Futokoroni-Tamaru-Morokuzu*